

聖徒の道 4

1972



心の糧

十二使徒評議員会補助

マリオン・D・ハンクス



教会がなす業のどれをとってみても、その目的は、神の子らを神の王国につなぐこと、人に人間の起原と将来の受け継ぎを教えること、人生の目的とそれを成就するための計画、また永遠の可能性を知らせ、恵みをもたらすことである。それは神の子らを強め、高めて永遠の原則を実践させ、学ばせ、仕えさせ成長させ、まわりに善を施させることである。そして、火と燃えさかる時々の問題に対抗して、神とのつながりを感謝し、豊かな人生を生きていることの驚異を感謝できるよう、また人にとって大切な何かを求め、期待しておられる神を敬うことができるよう、援助することである。

さて、以上の目的はみな、羊の数を数えることではなく養うことであり、建物やユニット、組織、統計の数をふやすことではなく、神の子のひとりひとりを祝福することである。

我々の知るように、キリストは人種に関係なく、全人類に大いなる関心を寄せ、偉大な愛を持っておられた。キリストは幼な児を伴い、罪人を捜し求め漁師や取税人から従う人を召し出された。群衆の中であってさえ、すそをさわる婦人に心をとめるほどに、ひとりびとりに心にかけておられた。すばらしいたとえをもって、さげすまれていたサマリヤ人の己れを忘れた思いやりを人に教えられた。99匹を抱きながらも、失われた1匹を捜した行かれた。我々の目的は、彼に従うことである。

— も く じ —

復活と回復	N・エルドン・タナー	145
天国の光景	スペンサー・W・キンボール	147
物事の順序	ウェンデル・J・アシュトン	152
永遠なる生命	エズラ・タフト・ベンソン	154
キング・フォレット説教	ジョセフ・スミス・Jr.	158
方針と手続き		164
羽ぶとん	メアリー・プラット・パリッシュ	165
ニーファイ	メイブル・ジョーンズ・ガボット	168
マルコのおともだち	メアリー・M・ガードン	170
想像する以上に	マリオン・D・ハンクス	173
質疑応答		175
主の宮居にて		178
彼らの語ること		183
愛の力	ミルトン・R・ハンター	184
悪への寛容	M・ダラス・バーネット	187
いまひとたび	ジョセフ・テルトン	188
ローカルニュース		190

4月のこよみ

- 3日 1814年 ロレンズ・スノー（5代目大管長）オハイオ州マントウアに生まる。
- 4日 1870年 ジョージ・アルバート・スミス（8代目大管長）ソルトレーク市に生まる。
- 6日 1830年 末日聖徒イエス・キリスト教会組織さる。
- 7日 1829年 ジョセフ・スミス、モルモン経の翻訳を始める。
- 9日 1951年 デビッド・O・マッケイ 9代目大管長として支持さる。
- 15日 1846年 「恐れず来たれ聖徒」ウィリアム・クレイトンにより作曲さる。
- 16日 1847年 開拓者団が143人の男、3人の女、2人の子供達により組織さる。
- 18日 1853年 南アメリカ伝道部を開設するにあたり宣教師着任。
- 20日 1958年 ニュージーランド神殿デビッド・O・マッケイ大管長により献堂さる。
- 26日 1853年 ホンコンに最初の宣教師着任。

今月の表紙

表紙は、復活したキリストがマグダラのマリヤに現われた絵であり、裏表紙はイエスが埋葬されたと言われる墓の写真である。

聖徒の道

1972年4月20日発行

発行人 マービン・S・ハーディング

発行所 東京都港区南麻布5-8-10

末日聖徒イエス・キリスト教会
電話 (442) 7459

印刷所 太陽印刷工業株式会社

定価 100円

予約 一年間 1,000円

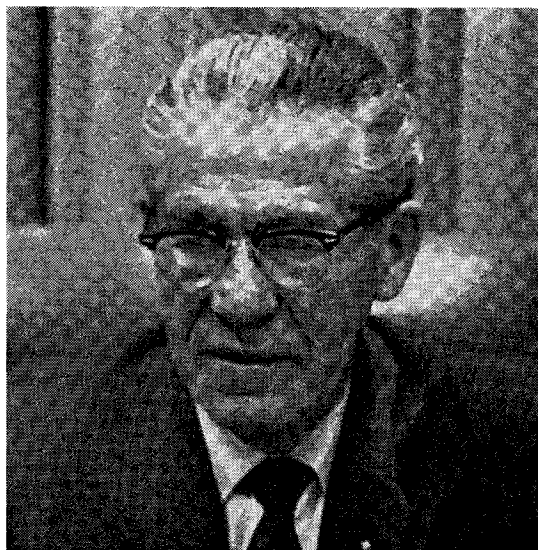
外国 4ドル50セント

大管長会メッセージ

復活と回復

末日聖徒イエス・キリスト教会
第二副管長

N・エルドン・タナー長老



4月は、人類史上最も大いなる2つの出来事を思い起こさせる、まさに歴史的な月である。それは我々の主、救い主イエス・キリストの死と復活であり、末日に地上に回復されたキリストの教会、その王国の再建である。また教会員は、キリストが紀元前1年の4月6日に誕生されたことをも信じている。(教義と聖約20：1)

我々が救い主の誕生、死、復活を思う時、「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びない

で、永遠の命を得るためである」(ヨハネ 3：16)との言葉に実感を覚えるのである。イエスは十字架上で血を流し、御父に苦しみの叫びをあげながら死なれ、御父は御子の嘆願を聞きつつ、その苦悩を見ながら非常な苦痛、悲しみに耐えられたにもかかわらず、それは御二方と地上に生を受けたあらゆる人間にとっての勝利であった。

我々は詩人チャールズ・H・ガブリエルと共にこう歌うのである。

「主イエスの愛に ただおどろく

復活と回復

恵みの深きに われ惑う
罪びとのため 十字架にて
流されたる血に 身はふるう
つき刺されし主の 手を思い
その愛と恵み 忘れ得ず
みくらの前に ひざまずいて
主のみめぐみを たたえまつらん

(讃美歌76番)

我々は折々これらの重大な出来事を熟考し、それが我々にとっていかなる意義を持つのかを十分に理解しているであろうか。我々が自分の罪の贖いに苦しまぬよう、代わってその苦痛を受けようと言われた救い主の驚嘆すべき愛を、胸に思い描くことができるであろうか。我々は、御父の生命と救いの計画に従って人類を生ずるためにアダムが墮落し、墮落により死がもたらされたため、人類を死の縄目から解放する道と贖いとが必要になったことを理解せねばならない。

それが、主の死と復活の目的であった。こうして全人類が墓から贖われたのであるが、主は我々がより大なる祝福にあずかるよう望んでおられる。永遠の死より救いは実にすばらしいことであるが、主は、我々が昇栄して永遠の生命を得、永遠の父、神と生活を共にするべく、我々に1つの計画を与えられた。

そのゆえに、主は御自身の教会を再建されたのであった。それは、聖徒と呼ばれる者たちが教えを受け、悔い改め、バプテスマを受け、権威ある者の按手による救いの儀式を受けるために、その昔使徒たちと共に組織された教会とまったく同じものである。

これは、世に広く理解されてはいないことである。キリストの教会の一員として、この末日に回復

され、啓示された完全な福音を教えられている我々は、何と恵まれていることであろうか。神は実在の御方で、我々が似せて造られたこと、我々は神の霊の子供であること、神は我々を愛し、心にかけていて下さること、従うならば神のみ前に帰られることを御子を通して教えておられること、み前に家族や愛する人々と共に永遠の進歩を遂げられること、それらは何と大なる祝福であろう。

イエスは言われた。「見よ、これわが業にしてわが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」(モーセ1:39)

しかし、単に以上の事柄を知り、教会員であるだけでは救いは得られず、約束の祝福も与えられない。信仰ある者に約束された祝福を受けるのは、御父のみところを行ない、戒めを守り、福音の原則に従って生活した時である。

我々は「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。第二もこれと同様である。自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」(マタイ 22:37, 39)との第一に大切な戒めを常に心にとめつつ、戒めを学び、戒めに従わなければならない。我々がこの2つの戒めに従うならば、「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」(マタイ 6:33)とのみ言葉を心にしつつ、他の戒めを受け入れ、守る態度が養われるはずである。

教会の設立と復活とを同じ季節に思うことは、いかに似つかわしいことであろうか。復活は、死よりの解放を可能にし、救いの儀式を備えた教会の回復は、我々の信仰と忠実さに従い、昇栄と永遠の生命を可能にするのである。

天国の光景



十二使徒評議員会会長代理
スペンサー・W・キンボール長老

愛する兄弟姉妹、友人の皆様、天の窓を暗くする大きな罪惡について、現在多くのことが言われている。私たちは不道徳を見て身震いを覚える。ひんぱんにある離婚、家庭の崩壊、少年非行に恐れさえ抱く。私たちは時に立ち止まって、それらがみな罪惡ではなく、よくないことでも不従順な行動でもなくなっていることを、厳しく見つめ直さねばならないであろう。

私は、肖像画を描いてもらった時の経験をこれまでも再三話してきた。

神殿の4階に、大きな椅子が半円に置いてある十二使徒評議員会の部屋がある。そこで十二使徒たちの大切な集会が開かれるのであるが、部屋の壁面には、それらの兄弟たちの肖像画がかかっている。私はこの部屋に入った時に、親しく交わっている偉大な兄弟たちの絵を、尊敬と讃美に満ちて見上げたものである。

それからしばらくのちになって、大管長会の命により、私の肖像画があの兄弟たちの絵に加えられることとなった。

リー・グリーン・リチャーズ氏が画家に選ばれ、すぐに製作にとりかかった。私は彼のアトリエの一段高くなった台の椅子に腰かけ、できるだけハンサムに描かれるよう努めたのであるが、私らしい絵ができるにはそれは無

理なことであった。絵の具、筆、パレットなどの準備が整い、彼は私をじろじろ見つめては、キャンバスに手を加えていった。そのようにして、私は幾度もアトリエに通った。何週か過ぎて、絵は大管長会に提出され、そのあと妻や娘に見せられた。

しかしその絵は受け入れられず、もう一度やり直すことになった。

アングルを変え、何時間も費やして、やがて絵は完成真近になった。その日はいつものように多忙な日であった。私はその日、まるでこの世を離れて夢の中にでもいるかのようであった。

画家はその私の夢見るような目つきをキャンバスに写すことに苦心していたに違いない。彼はパレットと絵の具を下に置くと、腕を組んで、まっすぐ私を見つめた。私は次のように突然質問されて、ぎくりとして夢からさめた。

「キンボール兄弟、あなたは天国に行ったことがありますか。」

私はちゅうちょせずこのように答えたのですが、それも同様に彼にとって大きなショックだったようである。

「ああ、行ったことがありますよ。リチャーズ兄弟、私はこのアトリエに来る前にも天国の光景を見てきました。」彼は楽な形にすわり直して、私を真剣に見つめたが、目には明らかに驚きの色が見えた。私は続けて言った。

「たった1時間ほど前です。通りの向こうの神殿の中です。結び固めの部屋の白く塗った厚い壁、明かるく暖かなひだをとったカーテン、簡素でどっしりとした家具、さながら人を無限に写し出すかのように向きあって掛けられた鏡、おだやかに輝く目の前の美しいステンドグラスの窓、そこは外界の物音がすべて遮断された世界でした。部屋にいた人は、みな白い衣に身を包んでいました。そこには平安と調和と心からの期待がありました。きちんと身づくりをした青年とこの上なく愛らしく装った女性が、表現の域を越えるほどに美しいさまで祭壇をはさみ、ひざまずいていました。私は彼らを地上でも日の王国でも永遠に結婚させ、結び固める天の儀式を、正当な権能をもって執行しました。そこにいたのは

心の清い人たちでした。天国はそこにありました。

永遠の結婚式が挙行され、出席者からお祝いの言葉を受けている時、幸福にあふれた父親は喜びを満面にたたえて、手をさしだしながら言いました。

『キンボール長老、妻と私はごく平凡な人間で成功者ではありませんが、自分の家族には大きな誇りを持っています。』彼は続けました。『神殿結婚のためにこの神聖な宮に入るのは、8人目のこの子で最後です。みんな相手と一緒にこの末っ子の結婚式に来ているんです。きょうは私たちの特別うれしい日です。8人の子がみんな正しい結婚をしたんですから。みんな教会に熱心で主に忠実です。上の子たちは子供たちを立派に育てています。』

私は彼の節くれだった手と質素な外

見を見つめながら、『これこそ、自分の使命を全うした神さまの本当の息子だ』と思いました。

私は彼の手を握りながら、『成功でしょう?』と言いました。『それは私が今まで聞いたうちで最も偉大な成功です。貯えや銀行預金や土地や財産をたといかに持とうと、それだけでは失敗です。あなた方は自分の生活を正しく保ち、立派な子供たちを育て、信仰とみわざのうちに子供たちを訓練し、そのようにしてこの地上に送られた本来の目的を果たしていращるのです。』

私は話終わった。画家を見上げると、彼は身じろぎもせずに深く何かを思うようにただ立っていた。そこで私は続けて言った。「兄弟、天国の光景を私は幾度も見ていますよ。」

「ある時、私たちは遠くのステーキ部大会にでかけました。そして土曜日の昼頃、ステーキ部長の飾り気がない簡素な家に到着しました。ノックすると赤ん坊を抱いたやさしそうな母親がドアをあけました。彼女はメイドや召し使いのいる家を見たこともないような、そんな感じの婦人でした。絵のモデルでもなく社会の一線に立つ女性でもありませんでした。髪は質素にとかしつけられ、衣服は上品で慎み深いものでした。彼女の顔は笑みを浮かべ、若くはないながらも、豊かな経験と意義ある人生を生きている充実感がみごとに調和して見えました。

その家は小さく、いろいろな用途に使われる部屋に通されると、部屋は満員になりました。中央には長いテーブル



ルと椅子がたくさん並んでいました。私たちは、子供のうちの何人かを隣りにあずけて、私たちのためにあけた小さな寝室でくつろぎ、また居間に戻りました。

彼女は、台所で忙しく働いていました。彼女の夫であるステーキ部長はまもなく仕事から帰り、私たちを歓迎し、誇らしげに仕事や遊びから帰った子供たちを紹介し始めました。

やがて大勢が手伝ったため、魔法をかけたようにすばやく夕食のテーブルが整いました。手伝う手つきは器用で慣れたものでした。どの子も自分の責任を教えられている様子でした。みんなする仕事を持っていました。ある子はテーブルクロスを広げ、ある子はナイフとフォークを並べ、ある子はその上に大皿をふせました。（皿は高価なものではありませんでした。）そしてクリームミルクの入った水差しが運ばれ、自家製パンが山に積まれ、ボールが置かれて、果物の皿とチーズの皿が出されました。

1人の子供が椅子の背をテーブルにつけるとみんなはいっせいにテーブルに向かい、椅子のそばにひざまずきました。小さな男の子が家族の祈りを頼まれました。その子はその場で、家族や学校の勉強のこと、また宣教師や監督に祝福があるようにと祈り始めました。大会にやって来た私たちが『よい話ができるように』、父親の教会の責任について、子供たちが『みんなよい子で親切をするように』、そして寒い夜に丘の上の羊小屋で生まれかかっている子羊のためにも祈りました。



幼い子が食物の祈りをし終わると、13の皿が表に返され、ボールにミルクがつがれ、夕食が始まりました。食べ物や家や子供たちや、その他のことでも、言いわけめいたことは一言も聞きませんでした。会話は活発で楽しく、子供の行儀振舞いは立派でした。その両親はどんな時にも落着きと威厳をもって対処していました。

家族数が限られ、子供のいない家庭も多い昨今、1人2人の子がわがままぜいたくに育てられていたり、召し使いたちを雇って豪勢な暮らしをしたり、家庭を顧みず崩壊するにまかせたりすることの多い中であって、相互に助け合い、愛し合い、一致が見られ、子供たちがわがままを知らずに成長している大家族を目のあたりにすることは、ひどく新鮮に感じられました。数の足

りない椅子、古びたじゅうたん、質素なカーテン、小さい家、少ない部屋を大勢が使わなければならないこと、それらは少しも気になりませんでした。私たちは暖かく、健全で、簡素なその家庭の心に触れて、真底くつろぎ、満たされたのでした。」

私は息をついた。「リチャーズ兄弟、私はその日も、そしていろいろな所で何度も天国の光景を目にしましたよ。」彼は絵を書くことなど眼中にない様子であった。もっと聞きたいふうにじっと耳を傾けて立っているので、私は心なくも別の話をまた始めた。

「インディアン指定保留地でのことです。ナバホー・インディアンの女性は子だくさんが多いのですが、ひとりの婦人は結婚後数年たっても子供に恵まれませんでした。夫はかなり良い職



を持っていました。2人は最近教会に改宗した人たちでしたが、週末に市場で買物をしていた時のことです。いっぱいにつまったかごをながめると、ビールもコーヒーもタバコもなく、良い食料ばかりであることがわかりました。私たちは彼らに『ポストラム(コーヒーの代りに飲まれる、小麦から出来た飲物)は好きではありませんか』と話かけました。私は次のような答えをきいて、心を打たれました。『はい、好きです。以前はコーヒーやビールに明け暮れていましたが、モルモンの宣教師から知恵の言葉のことを聞いた時から、ポストラムを飲んでいます。ポストラムは子供にもいいし、喜んで飲んでく

れます。』

『子供ですって。あなたがたは子供をお持ちでないとばかり思っていました。』彼らはそれに答えて、家にいろいろな年令のナバホー族の孤児を18人養っていると教えてくれました。ホーガン(ナバホー族の小屋)は大きいものでしたが、彼らの心はそれよりももっと大きく広いものでした。他の人のことを思う心、それはさながら人間の親切を育てるミルクです。偽りのない愛です。利己主義とひとりよがりな人生を生きる大勢の人は、あのような善意あふれるインディアンの人たちを見て、恥ずかしく思うことでしょう。」

私は画家に言った。「天国はホーガ

ンにもテントにもあります。リチャーズ兄弟、天国は私たちが自分で造り出すものだからです。」彼は絵に向かおうとしたが、明らかに身が入らない様子であった。彼は立ったまま、耳を傾けていた。

「ハワイに行った時のことでした。私はライエにある美しい小さな神殿に行きました。神殿には宣教師のグループが集まっていました。そこにはみたまがありました。彼らは次々と順番を待ちかねながら、主の福音を証しました。最後に、小さな日本人の宣教師に番がまわってきました。彼女は壇のわきに敬虔な様子でひざまずき、福音や福音によってもたらされた恵みについて心が焼けんばかりの感謝を述べ始めました。彼女は全霊を天に向かって注いでいました。

兄弟、そこには天国がありました。南太平洋の楽園の聖なる場所の小さな部屋に集まった、キリストのために闘う聖別されたうるわしい若人の中に。」

私は続けた。「リチャーズ兄弟、家庭の夕べの開かれる時、天国は私の家にもありました。子供たちが部屋がいっぱいになっていた何年かの間、みんなは順番を待ちわびながら、歌を歌いゲームを司会し、信仰箇条を暗誦し、物語を話し、信仰を増す出来事や両親の話す福音に耳を傾けたものです。

また、ヨーロッパでも天国を見たことがあります。

ボーゲル長老という、強い信仰をもったドイツ人の青年がいました。両親の援助が得られないけれど、伝道に出たいと望んでいましたが、親切なアメ

リカ人の教会員が伝道費用を出してくるようになって、やがて伝道に出ました。立派な伝道をしながら1年半ほどたったある日、スポンサーの奥さんから手紙が来ました。そこには、夫が交通事故で亡くなったため、お金を送ることができなくなったと書いてありました。

ボーゲル長老は、落胆の気持ちを隠して、よい解決法が見つかるように祈りました。ある日、アメリカ人の同僚のスミス長老と共にある病院の前を通りかかった時に、彼は経済問題の解決法を思いつきました。翌日、彼は少しの時間、用があると言って出て行きましたが、帰ってくるとほとんど口をきかず、早目にベッドにもぐり込みました。わけを聞いても、少し疲れていると答えるだけでした。何日かして、スミス長老はドイツ人の同僚の腕にまかれている小さな包帯に気づきました。しかし何を聞いても、何ともないと言うだけでした。

しばらく日が過ぎて、スミス長老は定期的に包帯がまかれるのに疑いを抱き、もはや隠しおおせなくなったボーゲル長老は、こう語りました。

『実は、アメリカにいる友人が亡くなって、伝道費用をもう送れないといってきたんだ。両親は援助してくれないというし、血液銀行に通えば、なんとか最後までやっていけると思うんだ。』人を救う仕事のために大切な自分の血液を売るとは、／　したたり落ちる血を貴い犠牲にしたのは救い主ではなかったのでしょうか。

兄弟、あなたは天国を信じています

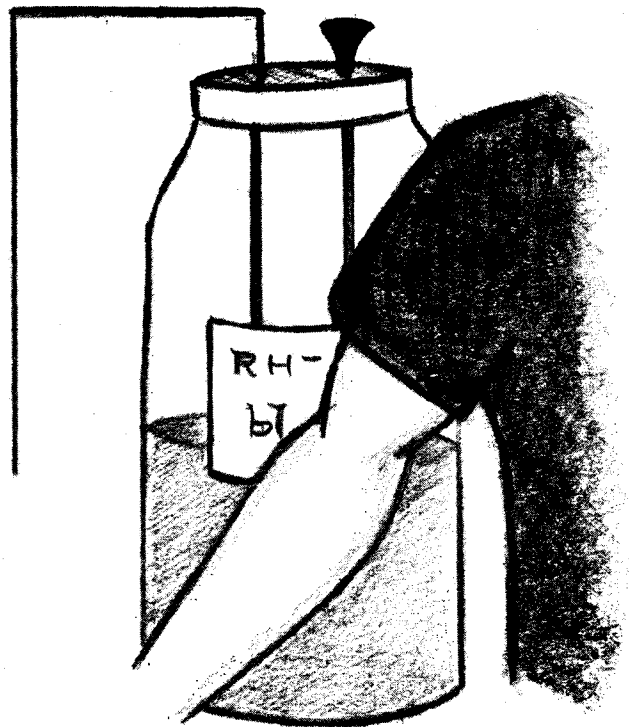
か。」私は尋ねた。「天国はあるのですよ。天国は場所をさしますが、状態をもさしています。それは家であり、家族でもあるのです。天国は理解と親切、相互の助け合い、自分を度外視した行動であり、静かでおだやかな生活、個人の犠牲、心からのもてなし、人々に対する健全な関心です。それは、虚飾や偽善なしに神の戒めを守ること。自分を忘れた思いやりです。天国は私たちのまわりにいくらでもあります。ただそれに気がつき、それを喜ぶことさえできるならば、兄弟、私は天国の光景をたくさん目にしていますよ。」

私は身を正して再びポーズをとった。画家はパレットと筆と絵の具をと

りあげて、手を加え始めた。そして、満足気のため息をつき、「これで完成です」と言った。

その時から、ソルトレーク神殿の4階の十二使徒評議員会の部屋に、他の兄弟たちの絵に並んで、今も私の絵が掛けられている。

イエス・キリストの福音は、人に正しく生きること、家族と家庭を神聖に保つことを教えている。福音は、従う人を完全へと動かす。それは真の道である。正しく生きるならば、人は神のように高貴な存在となるのである。救い主のまことの福音が私たちの生活に大きな位置を占めるよう、イエス・キリストのみ名によって。アーメン。



物事の順序

昨日、ダブルステニスの激しい試合のあと、私はロッカーの前にある木の椅子に腰かけて、自分のロッカーに錠をさし込んだ。ロッカーの錠は息子の自転車の錠前と似て、8ミリほどの厚みで金属の横棒がついて、丸いダイヤル部分からヘアピンのように長くなっているものである。

汗でしめった指で、私はダイヤルをあわせ始めた。
6, 38, 最後に28。

錠はあかなかった。

私はもう一度やり直した。

しかし、まだ錠はあかなかった。

もう一度、はやる心を押さえてまわしてみた。

錠はブルドッグのあごのように固くとじたまま、動かない。

この錠であかなかったことは、それまで一度もなかった。約束があったため、私はシャワーをあびて会社へ戻らねばならなかった。

もう一度ダイヤルをまわしてみようとして、私はふっと何が悪いのだろうかと考えた。するとこのようなことが心に浮かんできた。おまえは3つの数字の順序を間違えている。6, 38, 28とまわしたが、本当は、38, 28, 6なのだ。

私はダイヤルをもう一度まわしてみた。錠はいつものようにすっとあいた。

問題は、めずらしくテニスに勝って興奮し、しかも急いで会社に戻ろうとあわてていたことにあった。私は錠の数字の順序を間違えていたのだった。最後であるべきはずの6を最初にまわしていたのである。

人生の勝利や苦勞の中、忙しい日々の中、我々はいとも簡単に順番というものをとり違えやすい。私は今まで、錠の6というダイヤルと同じように、最後に来るべきことをはじめに行なっていたことがよくある。

イエスは私たちに、順番ということについてすばらしい教えを与えられた。エルサレムから2マイルほど離れた、オリブ山の斜面にある小さな村、ベタニヤへの旅を覚えているだろうか。ベタニヤにはイエスの良き友人マルタとマリヤの家があった。イエスが2人の家に入って行かれた時、マリヤはイエスのみもとにすわって、その言葉に耳を傾けたが、マルタはイエスをもてなす準備で忙しかった。マルタは「接待のことで忙がしくて心をとみだし」、イエスの所へ行き、「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」と言った。

主はやさしく答えられた。「マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである。」(ルカ10:40-42)

多くのことに思いわずらったマルタは、順番をとり違えてしまった。接待ということは、もっと大切なお客自身の訪問ということの次に来るものである。

私は、私たち夫婦がある晩招かれて行った家のことを思い出す。居間の家具類は真白な布でおおわれており、通された他の部屋も同じであった。その帰り道、私たちはその家の主人にとって、訪問者を歓迎するよりも家具を汚さないことの方が大事だと感じたのであった。

今週、私たちは隣人の家に招かれた。その家の息子はブラジルへの伝道に出ることになって聖餐会で話をしたのだが、真心あふれる立派な話であった。彼は両親に感謝を捧げていた。私たちはその子を幼い頃から知っていたが、すばらしい青年で、学校でも立派な成

績をおさめ、スポーツマンでもあった。

その彼の家で、私は彼の母方の祖母にあたる人といろいろ話をし、彼の両親のことに触れた。

「あの子は、何てすばらしい父親を持っていることでしょう。」彼女はこう話し始めた。「彼と私の娘がこの家を建てた時のことをよく覚えてますよ。自分たちで実際にずいぶん働きました。お父さんが梯子に登ってペンキを塗っていた時のこと、息子の1人が何か問題があってお父さんを呼ぶと、刷毛を置いて、梯子から降りて来て、その子の問題を聞いてやり、父親として援助を与えたものです。どんなにか早く家を仕上げてしまいたかったか、私はよくわかっていたんですけど。でも、家の完成より、そこに住む妻や2人の息子のほうが彼にとって大事だったんですね。」

自分の家族に対して、その父親はたしかに正しい順番を守ることができた。

健康な体の男性は、みな自分の家族の良き扶養者となるべきである。しかし、ある人々は扶養すること自体を扶養される人々よりも先に考える。またある人々は、教会の責任に熱心なあまり、家で妻や子供たちと過ごす貴重な時間をなくしてしまう。

何年か以前、ある上品な婦人が、地域で尊敬されている教会指導者の夫について、「彼は教会の仕事で忙しすぎるのです。クリスチャンらしさというものを忘れないようにと思うのですよ」と私に語った。

もし教会や自分の仕事や社会奉仕、趣味について最善を尽くすならば、どの人もさらに幸福になれることであろう。しかし、イエスがマルタに教えられたことに心をとめ、順番を正しく守ることができる人は、いっそう幸福な人である。

永遠なる生命

十二使徒評議員会会員

エズラ・タフト・ベンソン長老

列席の、またこの場におられない世界中の兄弟姉妹たち、このおごそかでもしかも喜びに満ちた場でこう申しあげるのは、聖典でも言われているように、私たちは皆同じ神様を父とする霊の子供であり、真実兄弟姉妹だからである。

私たちは永遠の存在である。私たちはこの死ぬべき世に来る前、英知をもった霊として生きていた。そして今生活しているのも永遠の一部分である。地上への誕生ははじめではなく、だれもがやがて経験する死も終りではない。

「われらの誕生は、ただ眠りと前世の忘却にすぎず。

われらと共に昇りし魂、生命の星は、かつていずこにか沈みて、

はるかより来たり。

すぎ去りし昔を忘れしにはあらず、また赤裸にて来たりしにもあらず、栄光の雲を曳きつつ、

われらの故郷なる神のもとより来たりぬ。」

ウィリアム・ワーズワース、「幼年時代を追想して不死を知る頌」田部重治氏訳

永遠の存在者である私たちは、それぞれの内に神性のひらめきを宿している。私は鉄のカーテンの両側を世界中幾度となく旅してきたが、天父の子供たちは本質的に善であると確信している。人々は平和に生活したい隣人によりことをなしたいと願い、家庭と家族を愛し、生活の標準を高めたい、良いことを行ないたいと思っている。人間は本来善なのである。私は神様が人々

を愛しておられることを知っている。

そして神様の小さきしもべである私も、天父の子供を愛する気持でいっぱいである。私はいわゆる上層階級から下層階級まで多くの人々に会った。彼らの家や畑や農場や店を訪れ、高速道路や飛行機の中で会った。大小の集会で会い、多くの教会を訪問し、ソ連のモスクワでは大勢の人が集まるバプテストの教会堂にも出席した。

兄弟姉妹、繰り返して申し上げるが、天父の子供たちは本質的に善なのである。私は主が人々を愛しておられると、はっきり知っている。小さきしもべとして、私も彼らを心より愛している。神がそのみたまを通して、あなた方をどこにいても祝福し、身近におりたもうように。

この誘惑と問題に満ち、罪多く、物事がまるで逆に言われている現代を生きていく時、私たちは確実に近づいてくる死と、人生の不可思議さ、神の力

と愛とを見て、心を低くされるのである。愛する人々を失う悲しみはだれでも経験している。しかし、そこには感謝もある。この命が永遠であることへの感謝。だれにでも、与えられる偉大な福音の計画への感謝。やがてその復活を祝う日がやって来る主イエス・キリストの生涯と教えと犠牲に対する感謝。

主イエス・キリストの生涯とみ業を神に感謝する。死の縄目を解き、世の光、命となり、生き方を示し、道を教え、こう宣言されたイエス・キリストを。

「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。……」(ヨハネ11:25-26)

昔、予言者ヨブは「人がもし死ねばまた生きるでしょうか」と尋ねた。(ヨブ14:14) 私の良き友人である合衆国上院議員のエベレット・ダークセン氏(1896-1969)は、亡くなる少し前にこのヨブの質問の答えともなるべき印象的な言葉を語った。「無限への入口に立って、見えるものと見えないものとをへだてている幕の向こう側にあることについて、考えない人間はかつてあったらうか。

不思議な本能で地上の体が朽ちる時を直感しながら、墓の向こうに何があるかを考えない人は、かつてあったらうか。人生の旅も終わろうとするあの奇妙な落ち着きを感じながら、永遠の未来と、そこがどのようなものであるかについて考えない人は、かつてあったらうか。



「主の計画に対する従順は永遠の昇栄への第一歩である」

何世紀も昔、ヨブという人はあらゆる物質的な恵みを受けながら、しまいに人が受けるあらゆる艱難を1人で身に受け、友と並んですわりながら、人間永遠の質問をした。『人がもし死ねば、また生きるでしょうか。』復活祭の季節には、全キリスト教徒が復活について考え、多くの質問の答えをそこに求めるが、質問の第一に来るのがヨブの言った『人がもし死ねば、また生きるでしょうか』という質問だ。

もし我々の住んでいる地球と宇宙が計画されたものだとしたら、設計者があるはずだ。全人類についての計画があり、計画者もいると信じなければ、だれがこの精巧な宇宙の神秘を理解できるだろうか。……

『人がもし死ねば、また生きるでしょうか。』夜のあとに朝が来るように、星がその軌跡を描いてまわるように、波の山に続いて必ず谷があるように、たしかに人はまた生きるのだ。』（U.S. ニュース・アンド・ワールドレポート）1965年11月8日）

たしかに、生命は永遠である。私たちがその偉大な真理をたとえ見失うことがあろうとも、私たちは地上の生活を終えたあとも生き続けるのである。

私たちは時に、いつかは朽ちてしまう取るに足らない事物に、あまりにも執着しすぎることがある。この世の宝は人生という学校にいる間、教室と黒板を提供してくれるにすぎないものである。私たちが、金、銀、家、土地、貯え、家畜その他の所有物があるべき位置に置くために、この世の宝があるのである。

その位置というのも、結局この世だけのものでしかない。私たちは、永遠に向かう第一のレッスン、すなわち主の福音の計画に対する従順を学ぶために、この世にある。

たしかにだれもが死ぬ。しかし永遠の別離はなく、本当は死は存在しないのである。復活は事実であり、聖典はその証で満ちている。主の栄光の復活のすぐあとを、マタイはこう記録している。

「また墓が開け、眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った。そしてイエスの復活ののち、墓から出てきて、聖なる都にはいり、多くの人に現れた」（マタイ27：52—53）

パトモス島の使徒ヨハネは、「死んでいた者が、大いなる者も小さき者も共に、御座の前に立っているのが見えた」（黙示20：12）と記している。

古代、近代の聖典から復活の証はいくらでも引用できることでしょう。

霊界はそう遠くにあるわけではない。この世と来世をへだてている幕が非常に薄くなることが時々ある。すでに亡くなった私たちの愛する人々は、私たちから遠い所にいるのではない。ある偉大な指導者が、「いったい霊界はどこにあるのだろうか」と問い、自ら答えている。「霊界はここにある。」

「（霊たちは）この組織された地球の境界を越えたかなたへ去るのだろうか。いやそうではない。彼らは永世にわたってここに住むために、この地球につかわされているのだ。」「……霊が体を離れた時、彼らは天父の前にある。そこで霊的な事柄を見聞きし理解する備えをさせられるのである。……もし主が許されるならば、またそれが主のみこころであるならば、あなたはこの世を去った霊たちを、今あなたが目で体を見るようにはっきりと、見ることができるであろう。……」（ブリガム・ヤング説教集第3巻英文P.367—369）

たしかに生命は永遠なのである。

「きょうの空が暗く見えても

あすの空は青いだろう。

雲がみんな流れ去れば

神の摂理が輝きわたる」

（作者不詳）

死はどのようなであろうか。ここに合衆国上院議員チャップレン・ピーター・マーシャル氏の語った出来事を紹介しよう。

「ある家庭で、幼い一人息子が治る見込みのない病気にかかりました。来る月も来る月も母親は心を尽くして看病しましたが、いつまでたっても回復に向かう様子がなく、その子はしだいに死の意味を理解し始め、自分はまもなく死ぬということを知り始めました。ある日母親がアーサー王と円卓の騎士の物語を読んで聞かせ、その本を閉じると、男の子はちょっと黙りこくっていましたが、それまで心に暖めていたのであろう質問をしました。『お母さん死ぬってどんなこと。痛い？』母親の目にはみるみる涙があふれました。彼女は何かを取りに行くかのように、つと立ち上がって足早やに台所へ向かいました。途中で、何と言うべきか心の中で祈り尋ねましたが、主から答えがありました。彼女はどう説明したらよいかを知りました。台所から戻った母親はこのように言いました。『ケネス、あなたは小さい時のことを覚えているでしょう。一生懸命遊んでとっても疲れてしまって、洋服も着換えずにママのベッドに飛びこんでそのまま寝てしまったことがあったわね。朝になって起きてびっくりしたでしょう。自分のベッドにいたんですもの。それは、夜のうちに父さんが大きな腕でよいしょっと抱いて、あなたのお部屋に運んだからよ。ケネス、死もそれと同じなの。私たちはある朝目をさますと、自分のお部屋にいるんだわ。主イエスさまは私たちのことを愛していて下さ

永遠なる生命

るからよ。』坊やは顔を輝かせて母親を見あげ、もう何もこわくない、天のお父さまに会いに行く時は、何も心配しないし、愛の気持ちがあるだけだろうと言いました。その子は再びその質問をすることなく、数週間後に母親の語った眠りについたのでした。それが死というものです。」(キャサリン・マーシャル、「ピーターという人」より)

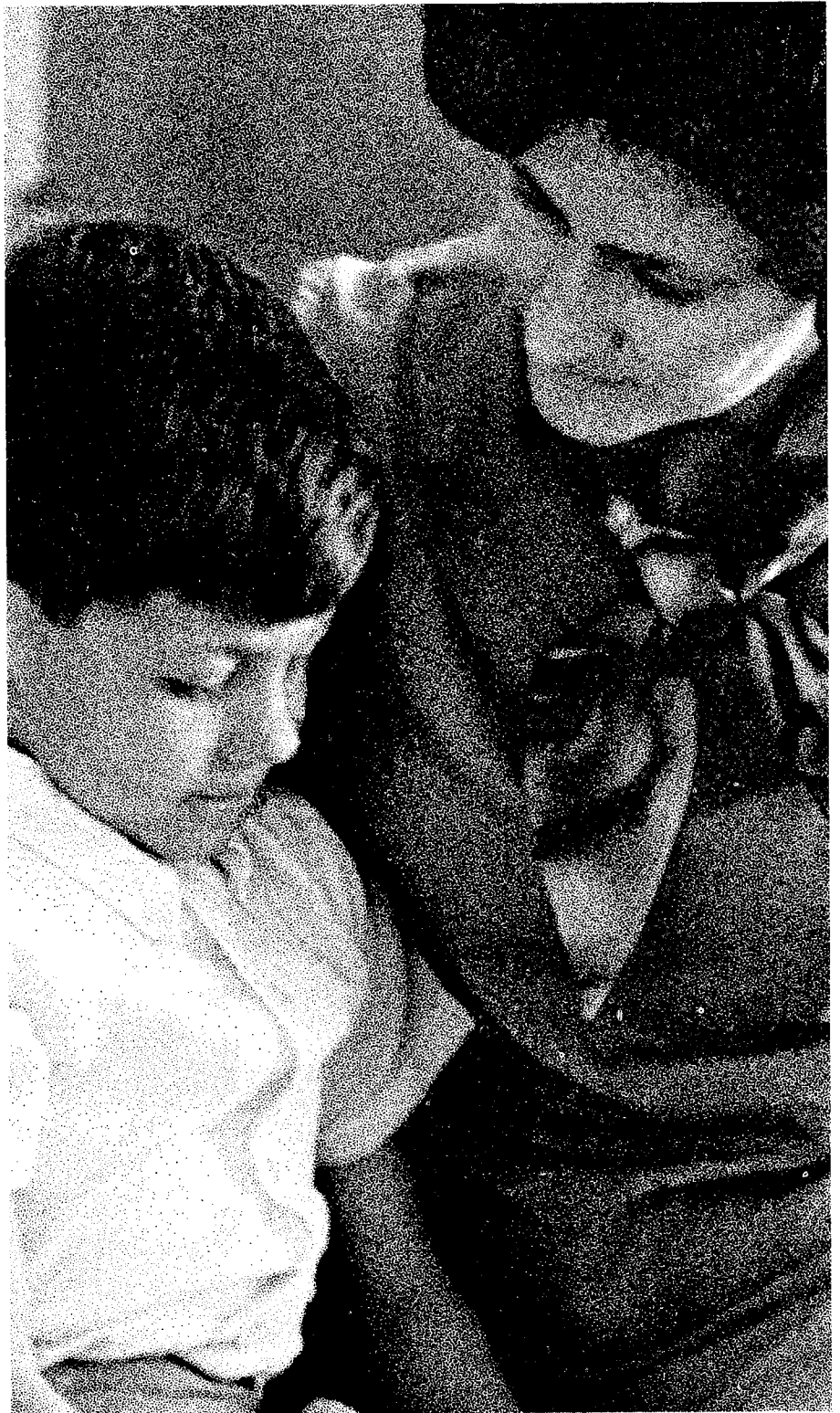
その通り、生命は永遠である。死は終わりではない。この復活祭の季節は、私たちが最も光輝ある主イエス・キリストの復活という出来事に心を向けるに一番ふさわしい時期である。

私はこれまでも幾度となく、感謝をもって証してきた。

イエスがキリストであり、世の救い主、贖い主、実に神の御子であることを知っている。イエスはベツレヘムの赤子として生まれ、人々の間で生活し導きと恵みを施す業につかえ、カルバリで十字架にかかった。そしてその3日後に復活された。

墓で悲しんでいる婦人たちに天使は告げた、「……あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。……」(ルカ24:5-6)「そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ」この言葉に匹敵する劇的な言葉を、歴史から見出せるであろうか。

キリスト・イエスの生涯ほどに地上に重大な影響を及ぼした人は、はたしているであろうか。私たちはキリストの教えを除いた人生というものを考えることができない。キリストなくしては、信仰と礼拝のもう想に迷い、感覚と物質に揺り動かされる恐れと暗闇の中に生を受けることであろう。私たちは、イエスの示された目標にほど遠いが、決してその目標を見失ってはなら



ない。光と完全へと登るけわしい道のりは、イエスの教えとその生涯、死、復活なしでは不可能であることを忘れてはならない。

神が、全地の民がイエスの教え、模範、その神性を受け入れ、全人類のために死の縄目を解いた栄えある復活を事実として受け入れる日の来ることを早めさせたもうように。

たしかに、私たちは幾度も繰り返して、救い主が教えられた愛の福音を学び、実践し、みこころを行なうことによって無知と疑惑の縄目を断ち切らねばならない。私たちが今も永世にも霊の喜びを経験するためには、この明快な栄光あふれる真理を知らねばならない。己れを捧げてみこころを行なわねばならない。生活にあって主を第一に置かねばならない。たしかに、私たちが主の愛を隣人と分かちあう時に、祝福は幾倍にも増すのである。

私たちはガリラヤの人の示された道からはずれ、世との闘いに負けることがあるかもしれない。しかし、私たちには主の助けがある。主は弟子たちに繰り返し繰り返し言われた。

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。……

何事でもわたしの名によつて願うならば、わたしはそれをかなえてあげよう。わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしない。

わたしは平安をあなたがたに残して行く。」

(ヨハネ14：1，14，18，27)

私たちは子供のやさしい祈りや、福音を生活に実践している人々のひそやかな信仰の中に、主の慰めの精神を感じるのである。自分の祈りを通して、また主を知り、実在を感じている人々の、聖くおごそかな証を通して主を知ることができるとは、何とすばらしい

賜であろうか。

兄弟姉妹の皆様、主の復活から、19世紀を経た復活祭の朝を迎えようとしている今、私は、キリスト・イエスが生きておられることを知っているとの厳粛な証を述べたいと思う。主はたしかに墓からよみがえられ、私たちもいつかよみがえるのである。主はよみがえりであり、命である。

主は復活ののち、旧世界で多くの人々に現われた。

神聖なる近代の聖典によれば、主は天に昇る前の3日間を新世界アメリカの「他の羊」と共に過ごされた。

予言者ジョセフ・スミスと同僚のシドニー・リグドンに、1832年2月16日に与えられた示現について引用してみよう。

「さて、この子羊に就きて為された様々の証の挙句、われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』こととなり。われらは、彼がすなわち神の右に座したもうを見たり。また、御父の生みたもう独子なりと証したもう声を聞けり。すなわち諸々の世界は彼の手により、彼の手を経て、また彼に因りて先に作られ、また現に作られ、これに住む者たちも皆神より生れたる息子と娘なることを証したもう。」(教義と聖約76：22—24)

たしかにイエスはキリストである。イエスは生きておられる。イエスは死の縄目を解き放たれた。イエスは私たちの救い主、贖い主、まさに神の御子である。

そして、聖書が告げるように、イエスはやがて再び地上に来られるのである。「……あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう」

(使徒1：11)

たしかに、この同じイエスが私たちの時代にすでに地上に来られた。栄光に満ち、昇栄に昇り、天父のもと地球の神である復活したキリストが、1820年少年ジョセフ・スミスに現われた。アブラハム、イサク、ヤコブの神、モーセの神、地球の創造主であったそのイエスが、私たちの時代に来ておられる。御父は、イエスを、ジョセフ・スミスにこのように紹介された。「こはわが愛子なり、彼に聞け」(ジョセフ・スミス2：17)

父なる神と御子イエス・キリストが少年予言者に現われたもうたことは、救い主の復活以来、最大の出来事であった。回復されたイエス・キリストの教会の私たちは、謙遜に、感謝をもって、この証を全人類に述べるものである。この知らせは、世界に伝えられるべき知らせであり、天父の子供たちすべてに向けられた真理の訪れである。全世界300万の教会員はこの厳粛なる証を宣べ伝えるのである。現在、信仰厚い幾千の宣教師が、この大切な知らせを世界中に携えて行っている。イエスはキリストであり、人類の救い主、地の贖い主、まさしく神の御子なのである。イエスは地球の神であり、助け主である。

今日、2万人の宣教師と、300万の末日聖徒イエス・キリスト教会、モルモン教会の会員が、神は天から再び語られ、イエス・キリストが再び人に現われたまい、復活は事実であるとの証を述べている。

今、私は、彼らの宣べる知らせの真理であることを証し、自らの証をつけ加える。イエス・キリストの御名によって、アーメン。



モルモン思想
の 古 典

キング・フォレット説教

教会図書の古典に数えられるキング・フォレット説教は、1844年4月7日イリノイ州ノーヴーの教会大会で予言者ジョセフ・スミスが述べたものである。

大会には2万人ほどの末日聖徒が集まっていた。

話は、3月9日に事故で他界した予言者の親友、キング・フォレット長老葬送の説教であったと記録されている。説教の注解はウィラード・リチャーズ¹、ウィルフォード・ウッドラフ²、トーマス・バロック³、ウィリアム・クレイトン⁴による。この記事は教会歴史記録第6巻 英文P.302—717より転載した。教会歴史記録には次のように注釈がある。「これは速記による報告ではなく、記録者として訓練を受けた数名の者が入念に、また功妙に作成した報告であった。そこには明らかに不完全な点があり、予言者の語った事柄も十分な説明に不足している箇所がある。……」

また、この説教がジョセフ・スミスの死ぬ2カ月前になされたことに注意する必要がある。その数カ月間教会の敵対者たちの活動が非常に活発になっており、予言者はすでに来たるべきことを予測していたに違いない。

説教の前半を「聖徒の道」の今月号に載せ、5月号で完結させる予定である。

末日聖徒イエス・キリスト教会初代大管長

ジョセフ・スミス・Jr. (1805—1844)



愛する聖徒たち、私はこの説教を通して皆様に死というものを考えていただきたい。愛する兄弟、キング・フォレット長老が、落ちて来た石おけに押しつぶされ、井戸に落ち込み死亡した事件により、私はこのことを語ろうと思った。彼の友人や親戚、この町や他の町に住む人々、この会衆の中にも大勢いる友人を亡くした人たちから、話してほしいと再三言われている。私はこの事柄一般にわたって、私に能力がある限り、またこの事柄につき聖霊に靈感を受ける限りにおいて話したいと思う。

私が全能の神の教えをいただき、聖霊の賜を受けて、真実のこと、またあなた方が容易に理解できることを語り、語ることが真理であるとの確信が、あなた方の心と魂とに証によってもたらされるよう、あなた方の祈りと信仰とを願うものである。主が私の肺を強くし、風をなだめ、聖徒らの祈りを天に昇らせ、それをもって万軍の主の耳に達するよう祈らんことを。義人の祈りは大いに力があり、効果のあるものである。

ここには力がある。まことに私は、あなた方の祈りが聞かれると信じている。

私の前に横たわるこの問題について考えをいたす前に、あなた方が理解できるようまず道を敷き、初めから説き起こしたい。私が問題に入る時にあなた方に理解できるよう、少しの前置きをしよう。私は雄弁やあり余る言葉や多くの知識をもって、あなた方の耳を楽しませようとは考えない。あなた方に天よりの単純な真理を教えようとするのである。

神 の 属 性

第一に、私ははじめ、すなわち創造の朝に戻りたい。そこにこそ、我々が地球創造の時の如くに天のかなたに座す偉大なるエローヒムの目的、制令を理解し、熟知するための出発点がある。我々には、はじめに神御自身を理解することが必要である。出発が正しければ、終始正しく進むことは容易であるが、出発を誤れば、誤って進み、正しい所へ戻るのはむずかしいであろう。

神の属性を正しく理解している者は、世界にごくわずかしかない。人類の大半は、過去のこと将来のこと、はたまた人間と神との関係について、何も理解していない。彼らは、その関係がどのようなものかを知りもしなければ理解もせず、結局獣より少し物知りで、飲食し眠るだけよりいくらかましな程度である。全能者の靈感によって与えられるのでなければ、それが神とその実在についてあらゆる人の知っているすべてである。

もし人が飲み食いし眠る以上のことを何もできず、神の計画をひとつとして理解しないとすれば、獣も同じことを知っている。獣は飲み、食い、眠り神については何も知らない。我々が全能の神の靈感によって理解することができない限り、我々の知っていることは獣と同様のことである。人が神の属性を理解しないならば、自分自身を理解することはない。私ははじめに戻って、あなた方の心を、人間一般が熱望するより気高い領域、より高められた理解にひきあげたい。

私はこの会衆の男女、子供1人1人が、神はどのようなでおられるか心に問うてほしい。自らで尋ね求めてもらいたい。思いを心の深くさぐり、あなた方のうちのだれが神を見、御声を聞き、交わったことがあるか答えなさい。そ

れは、あなた方が長年心に抱いている問いである。その質問をもう一度繰り返す。神はどのような御方であろうか。だれかそれを知っているだろうか。あなた方のだれが神を見、神の声を聞き、神と交わっただろうか。これは、おそらくこの時以後あなた方の注目を集めるであろう質問である。聖典は、「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわれたイエス・キリストとを知ることであります」(ヨハネ17:3)と教えている。

だれかがもし神を知らず、神はどのようなものであるかを尋ねるならば、また自分の心の奥をよくみつめるならば、そしてイエスと使徒たちの言葉が真実であるとするならば、彼は永遠の命を持っていないと知るであろう。なぜならば、この他の原則に則した永遠の生命はあり得ないからである。

私が第一に問題にしたいことは、唯一の知恵ある真実の神の属性と、神がどのような御方であるかを知ることである。もし私が、神を知っており、その原則をあなた方に語り教えることのできる恵まれた人間であって見たまがそれらをあなた方に結び固めるとするならば、あらゆる男女をしてこれより沈黙のうちに座させ、手を口にあてがい手や声をあげることなく、神の人、また神のしもべらに逆らう何事も口にさせまいものを。もしそれができぬならば啓示や靈感にさらにごまかしをつけ加えることをやめ、予言者であることを放棄することが私の義務であり、世の残りの人々のようになり、偽りの教師を友として歓迎し、だれからも命をねらわれないことであろう。しかし、もし世の宗教を教える人々が、自ら神の知識に無知であることが明らかにされた時に偽りの神を放棄するほど



に正直であったならば、幾分でも私と同様に冷遇され、あなた方は私の命をねらうと同様他の偽りの教師たちの命をとろうとするであろう。もしだれかが私を偽りの教師と考え、命をとる権利があるとするなら、同じ考え方により、我々もあらゆる偽りの教師たちの命をとる権利があるはずである。その流血はどこまで続くであろうか。また被害を免れる者はだれであろうか。

信 教 の 自 由

だが、だれでも宗教に干渉してはならない。すべての政府はあらゆる人に妨害なしに自分の宗教を守ることが許すべきである。だれにも宗教の相違を理由として命を奪う権利はない。法律と政府とは正しきものも誤れるものも寛大に取り扱い、保護するべきである。すべて人間は偽りの予言者ともまことの予言者ともなり得る。それは当然かつ我国では憲法に定められた権利である。まことに、もし私が真理の神を持っているとすれば、宗教教師と自称する100人のうち99人までが地上の神の王国の鍵を持っているふりをしてゐる。もし彼らが権利を持たない偽れる教師であり彼らは偽りの教師であるがゆえに殺されねばならないというならば、全地は血に浸されることであろう。

私は、神とは何かを示すことによって、世が誤っていることを立証しよう。私は神に伺おう。あなた方のすべてに神を知り、神と近くなってもらいたいからである。もし私があなた方を神の知識へ導くとすれば、私への迫害はすべて止まねばならない。そしてあなた方は、私が神の僕であることを知るであろう。なぜなら、私は権威を持つ者として語るからである。

昇栄された人、神

私は、神がどのような御方であることを示すために、地球のできる前、はじめの時に戻ろう。神ははじめにどのような御方であつたでしょうか。地の果てまで、すべての人よ、耳を傾けて聞きたまえ、私は聖書によってそれを立証し、神の人類に関する計画を告げ、なぜ神が人々のことにかかわっておられるかを語ろう。

神御自身、かつては今の我々のようであり、今は昇栄した人となり、かなたの天の王座にすわっておられる。これは大いなる奥義である。もし幕が今日裂けたなら、そしてこの地を軌道に保ち、全地とそこに満ちてゐる物をその力により支えておられる神が御自身を現わされたなら……私は申しあげる。もし今あなた方が神を見たならば、あなた方は神が人の形であること、姿、形、有様がすべて人間のあなた方のようであることを知るであろう。なぜならば、アダムは神に似せてその姿、形に創造され、教えを受け、人が人と語り交わるように、神と共に歩き、語り、会話を交わしたからである。

友人を亡くして嘆いている人々を慰めるべく、死について理解するために、我々は神の属性と性格を理解し、いかにしてそのようになられたかを知る必要がある。それで私はあなた方に神がいかにして神となられたかを語ろう。我々は、神が永遠のはじめから神であつたと想像し、考えてきた。私はその考えを論破し、あなた方が見ることのできるよう幕を取り払おう。

この考えはある人々にとっては理解し難いが、単純である。神の御性格を確かに知り、我々が人が人と語るように神と語り得ること、神がかつて我々

のような人であられたこと、実に我々の御父、神御自身が、イエス・キリスト自ら住まわれた同じ地上に住んでおられたことを知るのは、福音の第一原則である。私はそれを聖書から示そう。

神とイエス・キリストを知る 永遠の生命

私が語るにふさわしい場所におり、大天使の切り札を持ち、迫害が永遠に止むように話せたらよかったものを。イエスは何を語られたであろうか。(リグドン長老、注意なさい。)聖典は、御父が御自分のうちに生命を持っておられると同様、子も生命を持つとイエスが言われたと教えているが、それは何をするためであろうか。しかし、御父のなされたことをするためである。答えは明らかである。ある意味で体を捨て、それを再び得ることである。イエス、あなたは何をなさそうとしておられるのか。父がかつてされたと同様わたしは命を捨て、それを再び得るのである。あなた方はこれを信じるか。あなた方がこれを信じないならば、聖書を信じてはいない。聖典はそれを述べている。私は、それに反ばくする地と地獄の知識や知恵の丸となった力に挑戦する。唯一の知恵ある真実の神を知ること、これが永遠の生命である。あなた方は、自分自身いかにして神々となり、神の祭司、王たちとなれるかを学んだ。

あなた方の前の神々がすべてなしたと同じように、すなわち、小さき者から大なる者へ、恩恵に恩恵を加えられ、昇栄から昇栄へ進むことにより、ついに死者の復活を成就し、永劫の光輝のうちに住まい、永劫の力を付与されて座す者たちと同じく栄光のうちに

座するのである。私はあなた方に、最後の時代、ある人々が、神のみ名を語る時に、神はあなた方や私を軽んじてはおられないことを知ってほしい。

永劫の光輝のうちに住まう義人

これらは慰めの第一原則である。人が夫や妻、父、母、子供、愛する親戚と離別する時に、地上の幕屋は横たわり朽ちるとも、再びよみがえり、悲しみも苦難も死ももはやなく、不滅の栄光の中、永劫の光輝のうちに住まい、神の相続人となり、イエス・キリストと受け継ぎを共にすることを知ること、は、嘆く者にとって何という慰めであろうか。相続とは何であろう。前に歩んだ人々と同様、同じ能力、同じ栄光同じ昇栄を継いで、神の位にまで到達し、永遠の力の王冠を受けることである。イエスは何をなされたであろうか。さて我は、父が世界をかくあらしめた時の業を見、そのことをなす。父はその王国を恐れとおのきをもて造りたもうた。我は同じ業をなさねばならぬ。我が王国を得る暁には父が王国に王国を持ち、栄光のうちに高く上げられるよう、それを我が父に贈る。それより父はいと高き昇栄を得、私は父の位を受け、それをもて我が身も昇栄を得る。かくして、イエスは御父の踏まれた道を踏み、神が以前になされたことを継いでおられ、そして神はそのすべての子らの救いと昇栄のうちに栄光を加えられ、昇栄を受けておられる。これは論議を越えて明らかであり、かくてあなた方はこれまでに数々言われてきた事柄について、福音の第一原則の幾分かを学んだのである。

梯子に登る時、あなた方は下から始め一步一步登って行き、やがててっぺんに達する。福音の原則についてもそ

れは同じである。あなた方は第一から始め、やがて、昇栄の全原則を学ぶのである。しかし、あなた方がそれらを学び尽くすまでには、幕を越えたのち大いなる時を要する。この世で理解することはすべてではない。我々の救いと昇栄につき学ぶのは墓を越えてさえ、大きな仕事である。私は、聖書に含まれていないことを研究するのは許されていないと思う。もしそれを行なったならば、余りに賢い大勢の人が「大逆罪」を叫び、私を殺すであろう。ゆえにきょう、私は古い聖書について語り注解者となろう。

私は聖書の最初のヘブル語の言葉を解釈する。聖書すなわちBerosheitの中の創造の歴史の最初のくだりを、注解しよう。

私はこの単語を分析したい。Baithは、「のうちに」「によって」「を通し」などいろいろな意味であり、Roshは、「頭」Sheitは文法上の終結を意味する。靈感を受けた人が書いた時、彼はbaithをそこに置かなかった。何の権威も持たないある古代のユダヤ人が言葉をつけ足した。彼は頭について話し始めるのはよくないと考えたのである。そこからはじめ、「神々の頭は神々を起こしたもうた」と書いてあった。それがこの言葉の本当の意味である。Baurauは、「生ずる」を意味する。もしあなた方がこれを信じないならば、神の学者を信じないことである。学者たちは、私が語った以上のことをあなた方に教えることができない。かくして、頭たる神が大会議で神々を生ぜしめたのである。

私はそれを英語に写して簡単にしよう。ああ、私を迫害したあなた方学者、博士、祭司たちよ、私はあなた方に、聖霊はあなた方が知っている以上のことを知りたもうと悟らしめたい。

頭たる神は神々を集め、大会議の座につき、地球を創造された。大いなる議員らはかなたの諸天の頂きに座し、行なわれつつある諸々の世界の創造を見守っていた。私が学者、博士と言うのは聖書学者をさすのである。私が今まで説明をしてこなかったのは、学者たちをうろたえさせ、皆をして彼らを笑わしめるためである。博学な学者らは、ある考えを奉じて聖典はかくかくしかじかを述べていると言うかもしれないが、我々は聖典を信じなくてはならない。彼らは変わろうとはしない。しかし、私はあなた方に、彼らの誤りを示そう。

私はラテン語、ヘブライ語、ドイツ語、ギリシャ語で書かれた新約聖書の旧版を所有している。私は今ドイツ語版を読んでいるが、それが最も（ほとんど）正しい翻訳であり、この14年間、神から私に与えられた啓示に一番近いことを知った。そこには、Zebedee(ゼベダイ)の子 Jacobusのことが述べられている。これはヤコブ(Jacob)のことである。英語の新約聖書ではそれがヤコブ(James)と翻訳されている。

さて、もしヤコブ(Jacob)が鍵を持っていたとしたら、永遠にわたってヤコブ(James)のことしかあなた方の口にのぼらず、決して鍵は得られなかったことであろう。マタイ伝4章21節について、私の持つ旧ドイツ語版では、JamesではなくJacobと記されている。

博士ら(科学者ではなく律法博士のことである)は、「あなたが聖書に基づかないで何かを説くならば、私たちは大逆罪を叫ぶ」と言う。神が我々と共にまし、啓示されるのでなくては、我々はどうして地獄の破滅を免れることができる。人は我々に鎖をかける。ラテン語はJacobという意味のJacobus

と言い、ヘブライ語はJacobと言い、ギリシャ語はJacobと言い、ドイツ語はJacobと言う。ここに、4つが1つに反対している証がある。私は神に、この古い書物を所有していることを感謝する。だが、聖霊の賜をさらに感謝するのである。私は世界で最も古い書物を得た。しかし私は心の中に、最も古い書物を、まさに聖霊の賜を得た。私は4つの聖書をみな持っている。あなた方学者たち、読めるならば、ここへ来て読むがよい。もしrosh一すなわち神々の父、頭という単語をとりあげなかったならば、私はこの証を話さなかったであろう。私はただ私の正しいことを示すためにはそれをとりあげなかったであろう。

神々の会議

はじめに、神々の頭は神々の会議を開き、神々は共に集まり、地球を造って人を住まわせる計画を立てた。我々がこのように学ぶ時、我々は唯一の真実の神と我々が礼拝している御方がどのような方であるかを学ぶのである。神の知識を得てこそ、いかにして神に近づくことができるか、また、いかにして、答えをいただけるように願うことができるかを知るのである。

我々が神の属性を理解し、いかにすれば神に近よれるかを知る時、神は我々の前に諸天を開き、それに関するすべてを教えて下さる。

さて、私は私の言葉を聞くすべての人に、なぜ救いを説く学者たちが、神は諸天や地球を無から創造されたと言うのか尋ねたい。その理由は、彼らが神のことを知っておらず、聖霊の賜を受けていないことである。彼らは自分の考えを否認する者をみな神の冒瀆者呼ばわりする。もしあなた方が彼らに、

神は地球を何かから造られたと言ったならば、彼らはあなた方をばか者と言うであろう。しかし、私は知っている。全世界を束にしたよりも大きな知識を持っている。何にせよ聖霊が知っておられ、その聖霊が私のうちにまします。私は全世界を1つにしたより多くのことを理解している。私自身が聖霊と交わるのである。

創造という言葉の意味

あなた方は博学の博士らに、なぜ地球が無から造られたというのか、尋ねてみよ。彼らは、「聖書に地球が創造されたと書いているではないか」と答えるであろう。そして彼らは「創造と書かれているからには、地球は無から造られたはずである」と言う。さて、この創造という言葉は baurau という言葉からきている。それは無から創造するという意味の言葉ではない。それは組織するという意味、すなわち人が物質を組織して船を建造するというのと同じである。ゆえに、我々は、神が物質を組織して混沌の中から、すなわ混沌とした物質、あらゆる栄光を有した元素から地球を組織されたと言うのである。元素は、神の有する「時」以来空間を占めていた。元素の純粋な要素は、決して破壊されない要素であって、それらは組織され、再組織されるが決して破壊はしない。それらははじめなく、終りもない。(次回完結)

方針と手続き

宣教師と教会体育プログラム

教会のスポーツプログラムは、いかなる条件のもとでも、専任宣教師には公開されない。このことは、ワード部、支部、ステーキ部、地方部での練習競技や、どのようなトーナメントゲームにも適用される。専任宣教師の参加禁止という規制は、コーチやそれに関係する活動にも適用される。

長老のために

長老たちの中には儀式を執行する際に、必須の事柄だけを述べて、祝福をつけ加えることなく終ってしまう人が時折あることに注意を促したいと思う。長い祈りによるのではなく、みたまに導かれるまま、儀式に必要な事柄にさらに意義をつけ加えるような短い祝福、勧告、指示、訓戒、導きを言い表わすことによって、儀式をより印象的なものにすべきである。たとえば、確認の儀式は新たにバプテスマを受けた人に、聖霊の大切な賜物について気づかせることができるであろう。また幼児の命名、神権の聖任、按手任命や病人の灌油の結び固めに際しても祝福をつけ加えることが望まれる。

教会の建物内での商業広告掲示の禁止

商業関係の企業を広告するプラカード類が、教会の建物内に掲示されていると報告がなされている。教会の史跡やページェント大会への飛行機、バス旅行勧誘の広告に関して最もひんぱんに苦情が出ている。この種の広告を教会の建物内に掲示すると、教会が広告されている事柄を保証しているという誤解を招く事になる。教会は、企業や生産品に保証を与えるりはしないので、今後は、教会の建物内にいかなる種類の商業広告も掲示しないよう要請する。

少年が聖任される時

神権のいかなる職であっても聖任される兄弟は、名前を提議され支持される集会に出席し、会衆に見やすい前の方に着席すべきである。

ワード部の集会における管理者と最初に聖餐を受ける人

神権会、日曜学校、および聖餐会等のワード部の集会においては、管理役員である監督が不在の場合には、第1副監督が管理し、もし第1副監督も不在の場合には第2副監督が管理する。もし教会幹部あるいはステーキ部長会の一員が集会に出席していれば、より上位の職を有するその訪問者の管理のもとに監督会の一員が司会を行なう。しかし、ステーキ部長会の公式の代理としてワード部を訪問している高等評議員は、監督の管理権を譲り受けるものではない。

聖餐は最初に、壇上に着席している最も上位の権能を有する人に与えられ、次いで順次すべての人々に配られる。教会幹部あるいはステーキ部長会の一員が壇上に着席していない限り、ステーキ部長会の公式の代理としてワード部を訪問し、壇上に着席している高等評議員は、最初に聖餐を受けることによりその立場が認められる。また、公式の代理としてではなく自分のワード部に出席している高等評議員に関しては、必ずしも最初に聖餐を配るには及ばない。しかし、礼をつくして彼に最初に配っても何らさしつかえはない。

訪問している教会幹部およびステーキ部長会の会員は、いつも壇上に着席するようにすべきである。

ワード部聖歌隊

監督および支部長は「教会指導総合手引き」P. 132に注意していただきたい。

ワード部聖歌隊は、聖餐会で歌う公式なグループであり、定期的に聖餐会で歌うべきである。ワード部聖歌隊は監督の指示を受け、監督は聖歌隊が組織され、維持され、毎週の練習のために定まった時間と場所があるかどうか気を配る責任がある。

すべてのワード部および支部は聖歌隊をもち、また監督会、支部長会はいつも激励を与えるべきである。

雑誌の予約に対する幹部書記の責任

下記の説明文は、1971年8月5日付の回状に掲載された指示に代わるものである。

ステーキ部（伝道部、地方部）幹部書記は、雑誌の予約購読プログラムの指示を与える助け手としての責任を与えられるが、雑誌責任者とはならない。彼は必要に応じてステーキ部雑誌責任者と協議し、そのプログラムが成功するように必要な力を与え、そのプログラムがどのように進められているかをステーキ部長に知らせる。

ワード部（支部）幹部書記も同様の働きをする。各ワード部、支部は雑誌責任者をおき、必要に応じて1人以上の補助をおいてそのプログラムを進めるべきである。

トミーとベッツィーは西部へ出かけるのがうれしくて、はしゃいでいました。「ピクニックに行くみたい」とベッツィーは言いました。

「こんなに寒くなけりゃ、ほんとうにそうだけど」トミーはお父さんが食糧を積み込んだ幌馬車の中の羽ぶとんにもぐりこみながら答えました。それはちょうど、とびきり大きなまくらに体をしずめたようでした。幌のまわりは凍りつき、雪が降り、風が吹いているのに、その羽のような柔らかさは、トミーとベッツィーを、気持よく、暖かくしてくれました。

道は凍っていました。彼らが川への急な坂道を降りようとする時、お父さんがトミーとベッツィーを呼びました。「おまえたちは馬車から降りて歩いた方がいい。その方が安全だ。」

トミーとベッツィーは気持よい暖かい羽ぶとんから出るのがいやでしたが、2人とも、そんなことは言いませんでした。そのかわりに、2人は荷車からはい出して、風が吹く中で頭をちちこませて、川へ下る丘の残りの道を歩きました。ふたりがお父さんとお母さんを待っている間に、ひょうが降

りはじめました。ひょうは大きくて、トミーやベッツィーには小石が降って来るように思えました。ベッツィーはおびえてしまい、彼女もトミーもごえていました。トミーがいました。「ひょうのやつをとびはねたりして笑ってやろうよ。暖くなるよ。」2人のお父さんとお母さんは、ひょうに向かって笑っている2人を見つけました。

トミーとベッツィーは、自分の脇におびえた牛やお母さんを連れて、ひょうから自分の頭をかばうために、おなべをかぶっているお父さんに会った時、なくどころか、ふきだしてしまいたのしくなりました。2人は荷車の後によじのぼり、もう一度、気持よい暖かい羽ぶとんの中にもぐりこみました。

ほんの一しゅんのうちに、トミーは幌のはしを持ち上げて外をのぞきました。驚いたことに、荷車がたくさん、それぞれの町からやって来たのです。「どうやってみんな川を渡ったんだろう。」かれはふしぎに思って外を見た時、思わずさげびました。「渡しがすっかり凍りついている。」

かれのお父さんは、その時荷車の後の方にいましたが、トミーの声を聞いて答えました。「私たちは天のお父さまが用

羽ぶとん

メアリー・プラット・パリッシュ

絵：バージニア・サージェント



それはちょうど、とびきり大きなまくらに身をしずめたようでした。その羽のような柔らかさは、トミーとベッツィーを気持よく、暖かくしてくれました。

意して下さった橋を渡って来たんだよ。氷の橋は1マイルもあつたんだ。」

トミーは川の向こうを見渡しました。向こう岸まではずいぶんありました。重い幌馬車を渡らせるほどにも川はすっかり凍りついたのでしょうか。かれはお父さんがわれそうな氷の上を牛を移動させる時、だめではないかと気使い息をのんで見守っていました。しかし、氷はわれませんでした。全部の馬車が次々に後に続いてゆっくりと川を渡って来るのを見て、トミーとベッツィーはほっとして、ためいきをつきました。さいごまで、氷はわれなかったのです。

渡りおわるまで、みんなの胸の中は天父は自分たちを愛しみまもってください、西への旅をまもってくださいという気持ちに満たされていました。そんな時、1人の姉妹が歌い始めました。すると他の人々もそれに加わりました。歌声は馬車の行列がシュガークリークに着くまで続きました。

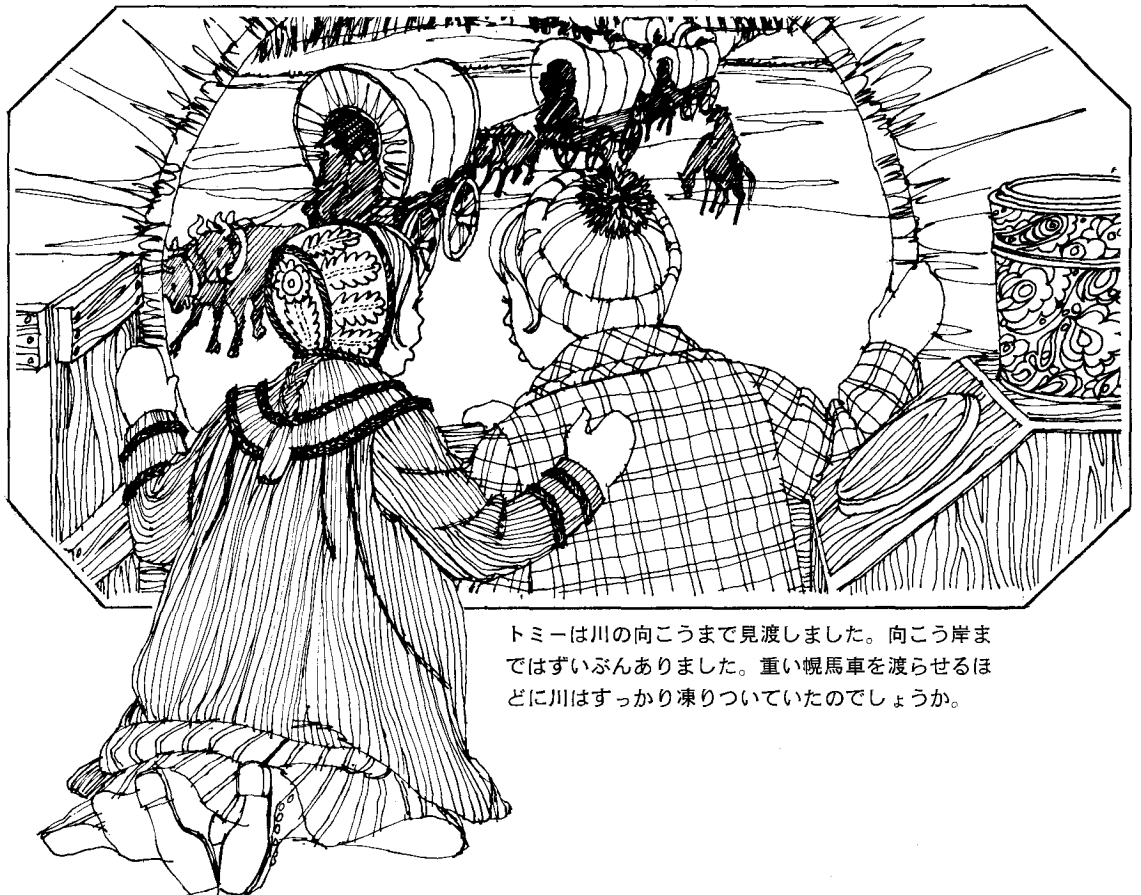
シュガークリークは天候が暖くなるまで聖徒たちがキャンプすると予定していたところです。一週間前にそこに着いた人々は歌声を聞いて、かれらの多くはキャンプファイヤーの集いを開き、旅行者たちをかんげいし、かれらが到着したらすぐ暖まれるようにしていました。トミーとベッツィーはキャンプファイヤーをかんしゃしました。1人は幌馬車に一

番近いたき火の前に立ち、すっかり暖くなるまで、体を前に向けたり後ろに向けたりしました。トミーが最初にたき火をはなれて、お父さんが牛にえさをやったり、ミルクをしぼったりするのを手伝いに行きました。

「ベッツィー」とお母さんが呼びました。「夕食にパンとミルクを食べられるように、パンを箱から出してちょうだい。」

パンは凍っていました。お母さんはナイフで切ろうとしました。それから金づちでこわそうとしました。けれどもそれはベッツィーを笑いころげさせただけでした。お父さんが手おけにミルクを持ってやって来て、言いました。「のこぎりを持ってこよう。」みんなは、お父さんが大きなのこぎりで小さなパンを切っているのを見て、大笑いしました。やっとお父さんはパンを小さく切ることができました。トミーとベッツィーは温いミルクの中に小さく切ったパンを入れて食べました。

その夜トミーとベッツィーが、暖かい羽ぶとんにもぐりこんだ時、ふたりはこの1日のうちに起こったことを考えました。ベッツィーは自分の子猫のことや、思いきって捨てて来た椅子のことや、ノーヴーに残して来た時計のことを思い出しました。あの時計が「おやすみベッツィー、おやすみベッ



トミーは川の向こうまで見渡しました。向こう岸まではずいぶんありました。重い幌馬車を渡らせるほどにも川はすっかり凍りついていましたのでしょうか。

ツィー」と言っているように思えました。そしてベッツィーは間もなく眠りにつきました。

トミーは違っていました。かれは自分たちをノーヴーから追い出した、悪い人々のことを考え、その人々がかれらを西へ追いやらないでくれたらよかったのと思いました。彼はますます考えこみ始め、だんだん目がさえてきました。

ねられないでいると、キャンプ地で何か物音がするのを耳にしました。それは大勢の人々が馬車から出て来る音のようでした。それからかれは馬車の幌についた氷がわれる音を聞きました。お父さんが幌のはしを持ち上げて「トミー、ベッツィー、起きなさい」と言いました。

トミーは起きなおると「何かあったの」と聞きました。

「ジョンソン姉妹のところに女の赤ちゃんが生まれたんだよ。」とお父さんは答えました。「おまえたちの羽ぶとんがあればこの寒い夜にお母さんと赤ちゃんを暖かくしてやることのできるんだが。」

その時ベッツィーが目をさまし、彼女もトミーもお父さんが、馬車から羽ぶとんをひっぱり出すのを助けてくれました。それからベッツィーは、お父さんがふとんでつつんでくれたのでまた眠りました。

トミーはこうふんして眠れませんでした。それで、彼は炎を上げて燃えているたき火のそばに立っていました。お母さんがジョンソン姉妹の馬車から赤ちゃんを抱いて出て来る間、しばらくかれはそこに立っていました。「羽ぶとんは、すぐ用意できるでしょう。それから私達は赤ちゃんをお母さんのところにつれていきましょう。きっと赤ちゃんは気持ちよく暖くなるわ」とお母さんは言いました。「そうしている間にたき火のそばは馬車の中よりも暖くなるわ。」トミーは幌の上の氷を見、それは本当だと思いました。

次の朝、彼とベッツィーが赤ちゃんのことを聞いた時、お母さんは言いました。「ゆうべは1人だけじゃなくて9人も赤ちゃんが生まれたのよ。」

「9人！」トミーとベッツィーには信じられませんでした。

お母さんは2人をかわるがわる見て、やさしく言いました。「私は2人の思いやりのある子供が、自分たちの大事な羽ぶとんをかしてあげたので、元気に育っている赤ちゃんを知っているわよ。」

トミーとベッツィーは、ほほえみあいました。そしてしあわせな暖かい気持ちでいっぱいになりました。



それからかれは馬車の幌についた氷がわれる音を聞き、お父さんが幌のはしを持ち上げて「トミー、ベッツィー、起きなさい」と言いました。

トミーは起きあがると「何かあったの」とききました。

ニ ー フ ァ イ

メイブル・ジョーンズ・ガボットによる
モルモン経物語。絵：ゲーリー・カップ

ニーファイはレーマンとレミュエルがぶつぶつぶへいを言うのをききました。

というのはかれらのお父さんリーハイがエルサレムをはなれようとしていたからです。お父さんはこの大きな町、エルサレムがほろぼされるであろうとむすこたちに話しました。しかし、レーマンとレミュエルはそんなお父さんの言うことは信じませんでした。

ニーファイは、レーマンとレミュエルよりもわかく、お父さんの言うことをよくききました。そこでニーファイはお父さんの言うことがよくわかるようにと神さまにおいのりをしました。

すると神さまはニーファイをおとずれ、かれのころをやらせました。ニーファイはお父さんがかたるはなしをすべて信じました。

ニーファイは弟のサームにじぶんがみききたすべてをかたてきかせました。

サームはそれを信じました。兄のレーマンとレミュエルは神さまをもとめず、またリーハイやニーファイのはなしを信じませんでした。

そのとき、リーハイはむすこたちに次のように話しました。「主が私にエルサレムにあるレーバンの家にかえるように言った。レーバンがユダヤ人のれきしと、せんぞのけいずをしんちゅうばんにきざんでおいたからで、だからレーバンの家へ行ってそのきろくを荒野から持ってくるように命じた」と。

兄のレーマンとレミュエルがこれをきいたとき、またふへいを言いはじめ、父がむずかしいことをするように言っているともんくを言いはじめました。父のリーハイは「これはお父さんがじぶんたちにそうするように命じているのではなく、これは主が命じたもうことなのである」とこたえました。

そしてニーファイの方をむいて、「なんじはふへいを言わなかったから主にめぐまれてたすけをうけるであろう」と言いました。

ニーファイは次のようにこたえました。

「私は主がそれを行なうように言われるときは主が私をたすけてくれるのを知っているので、私は行きましょう」と。

ニーファイとかれの兄弟たちはエルサレムにもどってレーバンの家に行きました。

話し合いでレーマンがレーバンの家に行くことになりました。レーマンがレーバンの家に行った時、レーバンはおこってレーマンをじぶんの家から外へつきだしました。

レーマンとレミュエルは、お父さんのいるテントにもどりたいたしましたが、ニーファイはその代わりにエルサレム

のもと住んでいた家に行き、そこにおいてきた金銀やたいせつなものを持ってきて、きろくとひきかえにこれらのたからものをレーバンの手にわたそうではないかと言いました。

レーバンは、リーハイたちがそのきろくをほしいと同じように富がほしかったので兄弟たちをころそうとしてめしつかいをよこしましたが、かれらは大きな岩のほらあなにかくれました。

レーマンとレミュエルはたいへんおこって、むちでニーファイとサームをおちはじめました。

とつぜん1人の天使があらわれて、「またエルサレムまで行け、そうすれば、主はレーバンをあなたがたの手にひきわたすであろう」と言いました。

レーマンとレミュエルはうたがって、次のように言いました。「どうしてそんなことができようか。レーバンはつよい人で50人のめしつかいをもっているのに」と。

ニーファイは言いました。「またエルサレムまで行こう。主はレーバン人よりもつよく、どの人たちよりもすばらしい人だから」と。

夜になると、おにいさんたちはエルサレムのお城のかべの外に行っかくれた。それからニーファイはエルサレムに行きレーバンの家にはいりました。ニーファイは庭にようじんぶかくそっと入りました。すると、そこによっぱらったおれいているレーバンを見つけました。

ニーファイはレーバンのつるぎをぬいてかれをころすように「みたま」に言われました。しかしニーファイは、「私は今までどんな時にも人の血をながしたことはなかった」とつぶやきました。すると「みたま」がまた、私に言われました。「主は正しいみこころをはたすためにあくにんをころしたもう。一人のほろびるのは、全国の民の信仰がなくなってほろびてしまうよりはよい。」と。

ニーファイはレーバンのつるぎで彼のくびをきりおとしました。そしてニーファイはレーバンのふくをきて、つるぎやよろいをまとい、レーバンの家にはいって行きました。

ニーファイはしんせいなきろくを持ってきて、お城のかべの外で待っている兄弟たちのところにはこぶように、めしつかいに命じました。そのめしつかいの名はゾーラムと言い、かれはニーファイをレーバンと思いよろこんではこびました。

ニーファイはあとでゾーラムに、もし私たちといっしょにやくそくの地に行くならじゅうの身にしてやるとやくそくしました。

そこでニーファイと兄弟たちはしんちゅうばんを持ち、レーバンのめしつかいをつれて、荒野にいる私たちの父、リーハイの待つテントにおじ帰ってきました。



マルコのおともだち

メアリー・M・ガードン

絵 ジェリー・ハーストン

イエス・キリストが地上にいらしたころ、マルコがほんとうに生きていたという記録はありませんが、これはほんとうにあったかもしれないお話です。

「ねえ、お父さん、もう少し起きていていいでしょう。」マルコのお父さんはマルコの声に力がこもっており、またそのたのむような目におどろきました。そしてお父さんはその子の望みがわかっていました。

エルサレムではすぎこしのまつり、つまりユダヤ人たちがかれらのためにしてくださった神さまの正しいことを思いおこすためのとくべつなおまつりのときでした。2階の大ひろまではイエスとその弟子たちがすぎこしを祝って夕食をとっていました。

「でもね、イエスさまと弟子たちが出てこられるのがおそくなるかもしれないよ」とマルコのお父さんはやさしくいいました。「かまわないよ。イエスさまのお顔をもう一度よく見るなら、ちっともかまわないよ。もう一度だけでいいんだよ。お父さん」とマルコはいいました。

マルコのお父さんはうなずきました。マルコはかいだんの下にすわり、もうすぐこられるかもしれないと思いました。かれは待ちつづけました。あたりはたいへん静かなので2階

の静かな話し声だけが聞こえていました。

マルコは2、3日前、イエスさまがかれににこやかなほほえみをかけられたことを思い出しました。イエスさまがエルサレムにお着きになった時、マルコは多くの子供や大人たちといっしょにイエスさまをむかえました。イエスさまはおとなしい小さならばにのっておられ、マルコは他の子供たちといっしょに、しゅろの葉や花を集めてイエスさまのために道にしくと、イエスさまはにっこりわらってかんしゃされました。

この静かな夜にマルコは待ちながら、イエスさまについて聞いた話を思い出していました。かれは心からそれが真実であることを知っていました。それは金持ちの小さな女の子が生きかえた話、らい病にかかっているシモンがいやされ清められた話、エリコにいためくらのこじきの目が見えるようになった話でした。

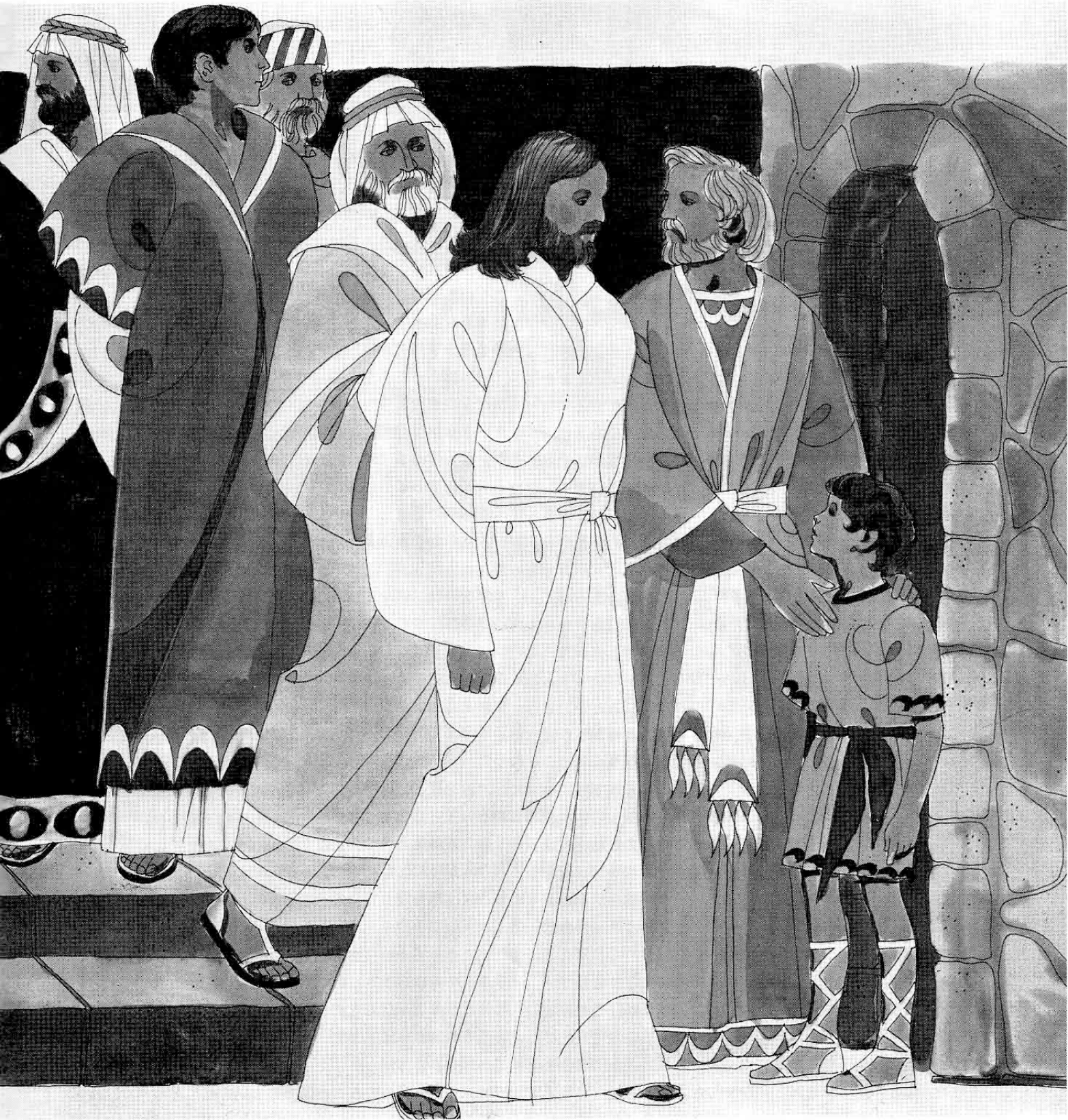
とつぜん2階のドアが開いたので、マルコはきたいして立ち上がりましたが、ユダと呼ばれる男しか出てきませんでした。ユダの声は耳ざわりで顔は黒ずんでいました。マルコはユダがかいだんを急いでかけおりながら「早くしろ」といっているのを聞きました。それからユダはやみの中に消えてしまいました。

2階からはそれ以上声は聞こえてきませんでした。マルコは待ち、耳をかたむけていました。家の中はたいへん静かでした。かれはしばらくの間かいだんに頭をもたれかけていましたが、まもなくねむってしまいました。マルコのお父さんはかれがかいだんのところでねむっているのを見つけました。けれどもマルコがイエスに会いたがっていたのをよく知っていたので、ねむっている息子をそのままにしてそとでへ行きました。

しばらくして2階のドアが開かれ、光りがマルコの顔にあたったので、彼は目をさしました。上にいた人たちがかいだんを下りてくるとマルコは立ち上がりました。イエスさまは11人の弟子のせんとくに立っておりてこられ、マルコのお父さんと話をするため立ち止まられて、マルコのほうを向き、かれの顔を長い間じっと見つめられました。マルコはにっこりほほえみました。イエスさまから大きな安らぎとすばらしい愛が伝わり、マルコの全身がみたされました。かれはイエスさまを待ったことがどんなにうれしかったでしょう。



イエスさまは11人の弟子のせんとくに立っておりて来られ、マルコのお父さんと話をするため立ち止まられて、マルコの顔を長い間じっと見つめられました。





少ししてマルコがベッドのじゅんぴをするとき、家でねむっている家族を起こさないようにしましたが、とつぜん家全体がやかましくなりました。こんぼうとたいまつをもった人々や、つるぎをもった兵たいたちがさけびながらさがしていました。「2階だ」とだれかがさけびました。マルコは声の主がだれだわかりました。それはユダでした。マルコのお父さんとめしつかいたちは走ってきました。「やつらはイエスさまをさがしているんだ」とマルコはさけびました。「おれたちはイエスを見つけるぞ。」1人があらあらしくいいました。かれらは部屋ぜんぶをさがし、どの部屋もメチャクチャにして立ち去りました。あちこちさがしてから一人の大男がおこったように、「イエスはここにいないぞ」といってユダのほうを向き、「わるいやつはどこだ」といいました。マルコはユダが「ゲッセマネだ。彼はそこへ祈りに行っている」とためらいながらいっているのがわかりました。

ベッドの用意ができ、ねまきを着ているのも忘れてマルコはゲッセマネの園に通じるオリブ山のほうへ向かってエルサレムのせまい通りやくらい小道を大急ぎで走りました。す足だったので石の上でも音をたてませんでした。エルサレムを出て南へ向かって走り、セドロン川という小川にかかる石橋をわたりました。かれは遠まわりをして小さなオリブの木々の間を進んでいきました。

マルコが木立ちの中を走って来たので、いねむりをしていた弟子たちはとつぜん目をさしました。かれは息をきらし、弟子たちに兵たいたちがイエスさまをさがしに家に来たこと、また兵たいたちがこの園につく前にイエスさまに知らせるため大急ぎで走ってきたといいました。

「イエスさまを助けてください。兵たいたちが来ます。も

う家を出ています。兵たいのせんとうにいる男はイエスさまがここにおられることを知っています。「ああ、どうか助けてください。」「イエスさまに話そう。坊や、でもあぶないから坊やはお父さんのところに帰ったほうがいいよ。さあ急いで、とちゅうでみちくさするんじゃないよ」とイエスさまの弟子の1人がいいました。

マルコは家に帰りましたが、朝までねむれませんでした。あくる日は気の重い1日でした。たくさんの人々が家にやってきて、何やらひそひそ話しあっており、こまっているようすでした。マルコがたずねようとしたら、お父さんは「心配することはないんだよ、マルコ。うまくいくからね」といいました。でもマルコはイエスさまがいなくなれたら一体何が正しいのだらうと思いました。イエスさまが人々の間におられてお話をなさったとき、人生は歌のようなものでした。どうしたわけか、たくさんの兵たいたちはイエスさまが近くにおられるといらだちませんでした。「なぜかれらはイエスさまを十字架にかけ、墓にほうむったのか」と考えました。マルコはとっても悲しくなりました。

そのつぎの安息日がすぎました。それは週の最初の日でした。マルコは最初、目を開いたとき1つの変化にきづきました。ひとすじの光がかれのわらぶとんにさし、ほこりがあたり一面にまっていた。マルコはベッドから飛びおきて窓に走っていきました。あたりは明るくかがやいていました。マルコの心を重苦しくさせていたものが消え去っていました。

マルコは、何かすばらしいことがおこったのだと思いました。かれはきのうの悲しみをおぼえてはいましたが、それについて考えることさえなく、かれの心は幸福でいっぱいになりました。イエスさまはよみがえられ、イエスさまの愛と平安がふたたびここにあって、ただイエスさまだけがいままでこのように幸福でみたまうことができたのだとマルコは思いました。

マルコは服をきて、かこいをした庭で2人の男に話をしていのお父さんのところへ急いで走っていきました。マルコはその2人がイエスの弟子だとわかりました。そこには3人の女の人がいいて、かれらのよろこんでいるようすを聞こうと、マルコは息を殺して耳をすましました。「イエスさまは生きていらっしゃいます。私たちはイエスさまにお会いしました。」「そしてイエスさまは弟子たちにイエスさまが生きていることを告げるように命じられました。」「イエスさまがいわれたようによみがえられました。」「

「イエスさまは生きていらっしゃるんだ。ぼくはけさおきたときそのことがわかったんだ。もうだれも二度とぼくからイエスさまを連れ去ることはできないんだ」とマルコはひとりごとをいいました。



想像する以上に

十二使徒評議員会補助
マリオン・D・ハンクス長老

昨晚のこと、重病の妹を病院に見舞うために車を走らせながら、私は心の中でこの記事の準備するように頼まれていたことが気になっていた。期日はとうに来ていたのである。

私が病院で経験したことは、心を謙遜にさせる霊的なものであった。そしてぜひこの経験を皆さんに話したいと思った。部屋に入った私は、すばらしい家族たちが、妻であり母である重病の妹を囲んで家庭の夕べを開いている光景を目にした。外国伝道から帰ったばかりの立派に成長した息子が自分の伝道について語り、病室の壁にスライドを写しているところであった。私も早速その家庭の夕べに加えてもらうことになったのである。

我が家へ着くと、私が病院へ行っている間待っていた家族たちは、家庭の夕べを開こうと集まっていた。私たちは共に語り、歌い、聖句を読んだ。それからあることのために断食していた私たちは、主の助けを必死に求めている愛する者の上に主の祝福があるよう家族の信仰を合わせて共にひざまずいて祈った。

私が皆さんに確信をもって話したいと思ってきたことは、結婚とそれに至る交際について、また結婚に不可欠な人格と資質、そして神と私たちが目指す結婚にあるべき愛についてである。病室での経験、我が家の家庭の夕べ、これらは以上私が話したいと思ってい

た問題に大いに関連あるので、この2つのテーマとその関係について私の証を述べたいと思う。証を述べるに当たりこの記事を読んでいる皆さんに、病院と家庭の夕べが私たちの愛とどのような関係を有し、また（もしすでに結婚しているのであれば）私たちの結婚といかなるつながりがあるのか理解していただけたであろうか。少し説明をさせていただきたい。

若人が結婚に至る愛について考え始める時、あるいはその愛を経験する時、彼らは将来の自分の家庭および家族について考える。それもある程度深く考える必要がある。結婚はある意味で家庭、そして家族を意味するものである。よい結婚とはよい家庭、そして幸福な家族を言う。

私が執拗とも思えるほどに皆さんに伝えようとしていることは、そのような結婚は極めて大切なことであり（これ以上重大な決定は思いつかないであろう）、また偶然に起こるものではないということである。すなわちこのような結婚は、心から幸福な結婚を願い、よい結婚をするための道を喜んで学ぼうとする2人、またその能力を有し、努力する成熟した2人によってもたらされるのである。ご承知のように、結婚は成人にとって1つの冒険とも言えるものである。すでに冒険にさしかかっている人は、まだ進歩する余地が残っている。これらの人々、またすべて

真の結婚による幸福を望む人々は、自分たちの夢を実現するためにも、そこにある原則を学び応用しなければならない。

もちろん結婚には、違った世界に育った2人、あるいは隣り同志の2人を互いに引きつける「何物」かがある。この「魅力」は愛にとって非常に大切な要素、甘美で神聖な要素ではあるが、決して愛のすべてを表わすものではない。それは尊敬、誠実、思いやり、感受性、責任、円熟という庭に育てられるべきかわい美しい花である。これらの性質は友情という強いきずなによってはぐくまれる必要がある。友情、それは自己中心的な態度をやめさせ、結婚という結びつきにおける2人の関心事に目を向けさせるものであり、2人にとって極めて大切なものである。これなくして、互いの幸福はあり得ない。

ダニエル・ウェブスター¹は、自由と一致は結婚に即応する政治の理想であると語った。2人の立派な若人が互いに愛を感じ、結婚、家庭、そして家族にあこがれるようになる。2人の交際はこれらの神聖な祝福にふさわしい友情と愛情に満ちている。彼らはさらに自由と一致について考える必要がある。アブラハム・リンカーンは、この2つの言葉の組合わせを国家と結びつけて理解していた。すなわち、一致が守られ強められない限り真の自由はあ



ハックス長老

り得ないと考えていた。

結婚についても同様である。イブセン²の劇「人形の家」の中に、結婚という結びつきにおける自由の根底ともいうべきものを表わす夫と妻のやりとりがある。妻に向かい夫が次のように言い渡す。「何をさしおいても、君は妻であり母なのだ。」すると妻はこう答える。「私は、すべての前に人間であると思っていますわ。」

結婚は互いに相手が生活し、進歩できるよう、楽しい思いやりのある雰囲気を作り出す責任を有する間柄である。

結婚は、無益なものを払って役に立つものを取り出してくれる友情である。それは相手が自分にとって無二の存在であり、愛し、個性を尊重し、守り、耳を傾ける対象であると言わしめるものである。

結婚とは、つねによいものを求め、「恋している状態」から、すべてにおいて愛し、創造し、支える状態にまで成長する愛である。

そして結婚は、神が定めたもう通りに結ばれた神の子供である2人、つねに神の恵みを求めて強められ、どのような境遇にあろうとも神と互いに交わした聖なる約束を尊ぶ2人を合わせの儀式である。

病室での出来事、そして悲哀、苦痛、喜びは、いく分か結婚の全貌を物語るものである。愛、家庭、家族という大きな図について考えていただきたい。この3つに対して備えをなそう。

忍耐強く相手に耳を貸し、惜しげなく与え、寛大に許す愛を求め、身につけようではないか。「汝愛に満たされるよう、汝の激しき心を抑えよ」という言葉の意味を知ろう。真の愛は人の全人格、全生涯、そして将来を心にかける。ある偉人の語ったごとく、人生で最も大切な宝は「我々の家庭の炉辺にある」ことを信じよう。そして今ひとりの偉人が教えたごとく、「家庭、家族、そして愛の中に、個人の生活、家庭生活、ひいては社会生活を全うする霊的な根源がある。この根源こそは混乱したこの世の中を救い、永遠の平和をもたらすものである」と信じようではないか。

そのような愛のある結婚、家庭、家族のために備え、そしてそれらを築こう。

妻であり母であること以上に大切なことはないが、愛する夫からまず人間として認められ、扱われないとしたらその女性は妻でも母でもあり得ないのである。もし結婚に幸福が存在するというのであれば、互いに伴侶の人格、個性、唯一の存在を認め、大切に守っていかねばならない。しかしこの自由は、一致すなわち結婚という結びつきを築くうえでの大切な約束として受けとるべきであって、利己心や自己満足の気持を優先してはならない。ある人いわく、結婚における伴侶はルート³の弦のようなものであると。すなわち違った材質で作られ、張り方、音の高さも異なるが、共に調和した音を

作り出すのである。幸福な結婚とよい家庭をもたらす愛は、この人生で最も身近で親しい関係において伴侶を完全に信頼できる人と認め、同時に互いに独自のやり方で相手をいつくしみ、守り、感謝する意味で権利や必要を大切にする。

そしてあなたにとって結婚がはるかに先のことであろうと、身近かなことであらうと、あるいはすでに契りを交わした状態であらうとも、賢明にそして注意深く選り、備え、祈りをしていたきたい。なぜなら結婚は人生で交わす最も個人的でしかも完全な約束だからである。恋は結婚をもたらす、結婚は家庭すなわち家族を意味する。私たちにとって結婚は永遠の誓約であり、永久に私たちを結びつける約束を含んでいる。そして神殿結婚は、単に神殿での経験、聖なる儀式、施した権威を物語るものではない。そこには私たちの結婚に対する心がまえ、準備、神殿に入るにふさわしい資格、そこで学び成長する能力も含んでいるのである。

これにはよく心に思い計り、祈った末での準備と選りが必要される。

結婚は特権のみならず大いなる責任をも互いに引き受ける二者の関係である。

1. ダニエル・ウェブスター(1782—1852)、アメリカの政治家、演説家。
2. ヘンリック・イブセン(1828—1906)、ノルウェーの劇作家、詩人。
3. 14—17世紀ごろまで用いられたギターに似た弦楽器。

質 疑 応 答



解答者 ストーン神殿長

「神殿結婚が永遠のものとなるには、約束の聖きみたまによって結び固められなければならないというのは本当でしょうか。だれが結び固めるのですか。」

解答者

ソルトレーク神殿長

O・レスリー・ストーン

神殿において執り行なわれる今も永世にもわたる結婚はすべて、ふさわしくあれば約束の聖きみたまによって結び固められる。このみたまによる結び固めは結婚に限られるものではなく、神権によって施されるすべての儀式についてもあてはまる。

神殿での結婚は、教会の予言者あるいは大管長、またはこの権能を受ける鍵を与えられている人から

答えは教会の教義を宣言するものではなく、助けと正しい判断を与えるためのものである。

結び固めの権能を受けた者によってのみ執行され得る。教会幹部以外に、この結び固めの権能は結び固める人がいる特別な神殿に限られている。

約束の聖きみたまとは何であろうか。すなわちそれは、上記の方法により権能を有する者が執行した結び固めはすべて、祝福を受ける者の忠実さによってのみ、神の「承認のしるし」と約束を受けるということである。

「ごらん、神がお前たちに要求なさるのは、お前たちが神の命令に従うことだけである。」（モーサヤ 2：22）

「汝らわが言うところを行わば、主なるわれこれに対して責任あり。されど、汝らわが言うところを行わずば汝ら何ら約束を受けず。」（教義と聖約82：10）

「すべてわれによりて祝福を受けんと願う者は、その祝福を与うるために定められたる律法と条件を創世の前より定められたるままに守らざるべからず。」（教義と聖約132：5）

ジョセフ・フィールディング・スミス大管長は次のように記している。

「『約束の聖きみたまによる結び固め』という表現について説明をしよう。これは今も永世にもわたる結婚のみに関することではなく、福音のすべての儀式と祝福に関することである。教会に入る時のバプテスマはこのみたまによって結び固められる。今も永世にもわたる結婚と同じように、確認、聖任、その他あらゆる儀式も同様である。

この言葉の意味は次の通りである。すなわち、人が福音の誓約と祝福によって受けるすべての誓約、契約、盟約、義務、誓い、成就是約束を伴う聖きみたまによって結び固められる。約束とは、祝福を求める者が終りまで心から忠実であればその祝福を得られるということである。もし忠実でなければ、聖きみたまは祝福を取り上げ、約束はそこで終わりを告げる。」（「救いの教義」第2巻 P.94）

主はつねに約束を守られる。そしてすべての結び固めは、私たちが自分の本分を果たし、主との誓約を守るならば祝福を受けるであろう。またさもなくば祝福を受けることはないであろうという主の約束を伴っている。

「女性は結婚の予定がないことに対して心配すべきでしょうか。」

解答者

扶助協会中央管理会員

アルバータ・H・クリスチャンセン



解答 クリスチャンセン姉妹

必要ありません。心配は問題を解決するものではなく、ましてや楽しいことでもありません。

結婚および母となることは神の定めたもうことであり、また家族が永遠に続くことを知っている末日聖徒の女性が、この世における幸福な結婚に対して希望とあこがれを抱くのは当然なことです。そして絶えずこの希望とあこがれを抱き続ける必要があります。しかしながら、結婚年令には国柄、文化、ひいては家庭によってかなりの違いがあることを心に留めなければなりません。ですからすべてにあてはまる、明確な結婚適齢期などある筈がありません。

たとえばアメリカの社会では、十代の後半で結婚し、賢明で幸福な結婚の伴侶になるまで成熟し切れない人々が数多くいます。その反面、晩婚によって大きな幸せを得、永遠に価値ある結婚生活を送るであろうと思われる人々もたくさんいます。結婚式が幸福や人の実績を保証するものではありません。離婚の裁判記録がこのことを証明しています。

すべての女性は、幸福で価値ある人となるための備えとして建設的な活動にいつも参加することです。これは、福音の教えと理想に一致した生活をすることから生じるものです。そしてできたら、ホーム・メイキングの技術も含めた特殊な職業訓練を受けることも必要です。また新しい友だちを作ったり

ふさわしく望ましい男性と知り合えるような活動に参加することも大切です。

真に幸福な女性とは、人生を人間性を高める経験の場と考え、無私の心で人に奉仕する喜びを知っている人のことです。

独身の女性はいたずらに年令を気にするのではなく、自分の人生がどのようなものであるかに大いに関心を寄せるべきです。

教会の指導者は次のような勧告を与えています。

「……独身の良き姉妹たちよ、祝福があなたたちから遠ざけられているのではないかと恐れてはならない。あなたがたは非難を受けることを恐れて、気のすまない結婚の申し込みを受ける必要はないし、そんなことはしいられていない。もし心の中で、福音が真実であると感じ、主の神殿において、ふさわしい条件のもとでこれらの儀式と結び固めの祝福を受けようと思うなら、またその思いはあなたがたの信仰、希望、願いであって今はまだ実現していないことを知っているのなら、主はそれを報いたまい、あなたがたは祝福されるであろう。なぜなら祝福は遠ざけられることはないからである。……」(ジョセフ・フィールディング・スミス、「予言者エライジャとその使命」, P. 51)

「また結婚の申し込みに応じていない若き姉妹たちよ、あなたたちは年を取りつつあるが、もし主の宮居へ行くにふさわしい者となるために備えをなし、この神聖な原則に信仰を持つならば、たとえ結婚の恵みがまだあなたたちのものとならなくても、主はふさわしい時にあなたたちを報いたまい、あなたたちに許されない祝福はない。祝福を逃がすことを恐れて、あなたたちにふさわしくない人の結婚の申し込みを受けるようにはしいられていないのである。」(ハロルド・B・リー、「若人と教会」 P. 132)

「救いとは」

解答者

七十人最高評議員会会員

ブルース・R・マッコンキー

救いは昇栄である。それはすべての問題のまとめである。

救いとは永遠の生命である。そして家族が存続し得る唯一の場である日の光栄の最高の位を受け継ぐことを言う。神の王国において栄ある昇栄を受け、家族が永遠に続くことである。また御父の栄光が満

ち、永久に子孫が続くことである。(教義と聖約132：19参照) 神の如くなる者のために取っておかれた位であって、それより低くあるいは小さい位では決していない。すなわち神となることである。



私の知る限りでは、救いを天父と御子のみ許における完全なる永遠の栄よりも低いものに定義している箇所は、数多くある啓示の中でたった3つしかない。これらの啓示とその結果限られた意味で使われるようになった言葉は、私たちが救いの全計画を総合的に判断するために与えられたものである。それ以外の聖句はすべて、救いを永遠の生命あるいは昇栄と同意語として使い、真心から神を愛し、神に仕える者に約束された大いなる報いを示している。

救いは永遠の生命を意味するが、次のような特別な使い方がある。

1. 無条件あるいは万人の救い

この救いは不死不滅である。すなわち復活していずれかの光栄の王国に行くことを言う。それは死、地獄、悪魔、そして果てしない苦しみから救われることであり、滅びの子を除くすべての人々にもたらされるものである。

2. 条件付きあるいは個人の救い

時としてこれは、福音の律法と儀式を守る者にとっておかれる日の光栄の王国での救いを意味することがある。しかしながら完全な意味では、日の光栄の最高の位で昇栄を得る者に限られる救いである。

3. 恵みのみによる救い

これは無条件あるいは万人の救いと同一であるが、この言葉が意味するところは、この救いが神の恵みによってもたらされ、福音に従うことは命じられていないことである。すなわち、神の愛、慈悲、

恩寵を通して得られる救いである。

4. 恵みと従順による救い

すべての人は神の恵みにより不死不滅の体に復活する。また神を信じて律法を守る者は復活して永遠の生命を受ける。

5. 日の光栄、月の光栄、星の光栄の救い

これらの救いは、それぞれの栄の王国での受け継ぎを示す。

しかしながら聖典で救いについて述べている時、ほとんど例外なくそれらは完全な救い、すなわち永遠の生命または昇栄を意味している。そしてこれらの言葉は全く完全に同意語である。

永遠の生命とは、神が今生きたもうている生命の名である。そして啓示は述べている。

「永遠の生命を……神のあらゆる賜の中最大なるものなり」(教義と聖約14：7) また「救いの賜に勝る賜はあらざればなり」(教義と聖約 6：13) と。なぜなら、神と神が生きたもう生命より大いなるものはないからである。

昇栄とは日の光栄の最高の位を受け継ぐことであり、そこでは家族が存続する。またその位を得る者は御父の完全なる栄を受け、永久にその子孫が続く。(教義と聖約132：19-24参照)

ジョセフ・スミスは次のように救いを定義した。

「救いは、エホバが持ちたもう栄光、権威、尊厳、権能、統治権以外の何ものにも存在しない。そしてこの救いは、エホバとエホバに似る者以外得ることはできない。」

救いの性質について、予言者はキリストの「如く」なることであると教えている。「キリストは御父に似る者であり、すべて救われた者の偉大なるひな型である。そして御父と御子の如くなる人々はすべて救われ、似ない者は滅ぼされる。この要が救いの扉を開けるのである。」(「信仰に関する講義」参照、P. 63-67)

ジョセフ・スミスのこの教えは、モルモン経の中で復活された主が救われた者について述べておられる次の宣言と同じ考えである。「…汝らはわれと同じ者になるべし。われは御父と同じ者なり。われと御父とは一つの神会を成す。」(Ⅲ ニューファイ 28：10)

このように、完全で正確な真の言葉の意味において、救いと永遠の生命と昇栄とは一つである。すなわち神のみ許へ行くことであり、神に似る者となることである。

主の宮居にて

次のものは大管長会及び十二使徒評議員会の管理のもとに作られたフィルム・ストリップから取ったものです。これは「今も永世にも」という映画の続編です。このフィルムの中で、末日聖徒の若い女の子、ジャンは婚約中の彼と結婚しないことに決めました。それは彼が神殿結婚ではなく市民結婚に決めたからです。

今度のこのフィルム・ストリップでジャンは別な若い青年と神殿結婚の準備をしています。彼女は、婚約者と監督との会話を通して、主の定めたもうた結婚を選んだ結果得られる祝福のいくつかについて学びました。

(著作権 末日聖徒イエス・キリスト教会大管長会、製作
ブリガム・ヤング大学映画部)

1. おめでとう、ブルース。私は君とジャンのことでとてもうれしいよ。



2. ジャン、ブルース、私は君たちそれぞれと面接し、君たちが神殿へ入る資格があることがわかりました。私は君たちが子供の時から知っているが、このように結婚できるほどに成長したのは、まるで突然のこのようだね。



3. 結婚するという決心は確かにこの生涯で最も大切な決心です。君たちは結婚の準備で忙しいでしょう。しかし物質的な準備も大切だが、永遠の結婚のための霊的な準備ほど大切ではありません。



4. 君たちは2人とも特別な人なのです。前世の行ないによって君たちは恵まれてこの神権時代に生まれ、福音を受けることができるのです。今君たちは私たちが初めて救いの計画を受け入れ、天父とともに家族と同じような家庭環境のもとに生まれたのです。



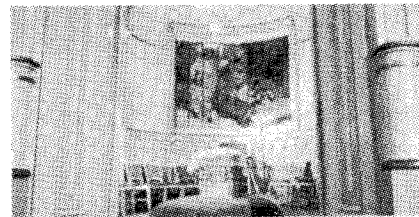
5. 君たち2人はよい家族の中で結婚できるので幸せです。このことが大切なのです。なぜかというと、君たちは家族が福音の計画の基本単位であることを知っているからです。完全な教会は、この世においても次の世においても利益と向上をもたらすために、家族に中心をおいています。



6. 教会のほとんどの儀式は権能を持っている人によって、どこでも行なうことができます。しかしある儀式は非常に神聖なので神殿でしか行なわれません。



7. 神殿の結び固めの部屋で行なわれる結婚は、バプテスマと同様に救いの儀式です。



8. バプテスマがどれほど大切か、君たちは知っていますね。私たちは救いの儀式を受けなければならないということを、救い主が模範と教えを通して私たちに教えて下さいました。——善行だけでは十分ではないのです。



9. 君たちは神殿に入り、教えを受け、永遠の旅路について大切な義務を学ぶでしょう。



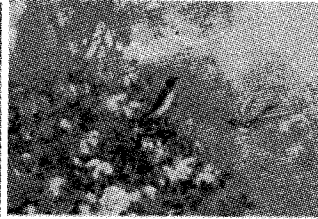
10. まず、この世の創造について学びます。



11. そして、エデンの園におかれた最初の両親についても学びます。

12. どのようにしてサタンがアダムとイヴを誘惑したか。

13. 彼らはどのようにして罪を犯し、園と神のみもとから追い出され、すべての面で反対のこの世に來たかを学びます。



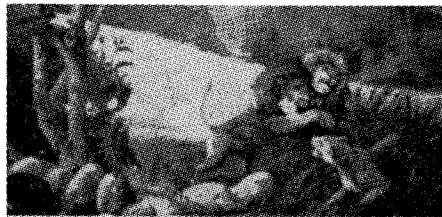
14. アダムとイヴはここで人生の不安だけでなく喜びも知りました。



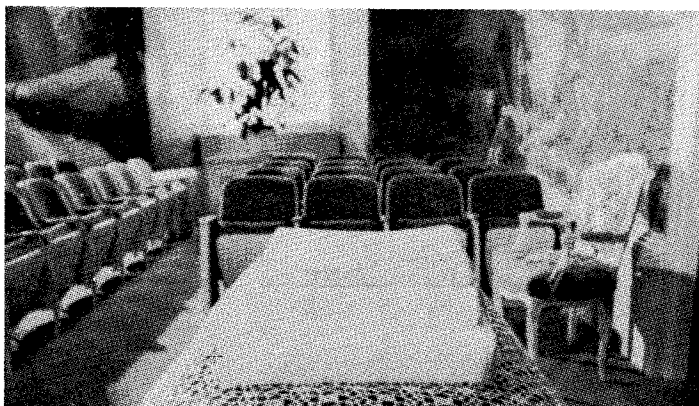
15. アダムとイヴはエデンの園から追い出されて、私たちが今住んでいる世界におかれました。



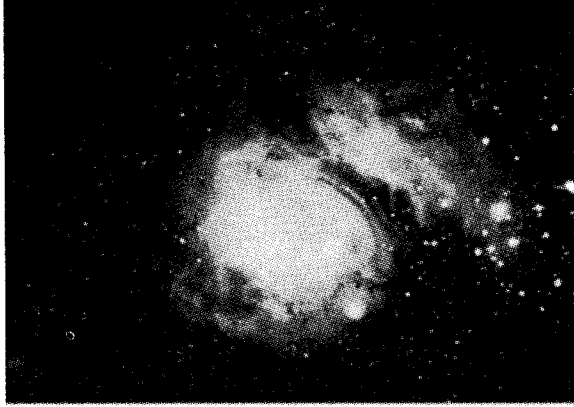
16. そして福音を教えられ、神に従うという誓約を結びました。それは君たちが神殿で結ぶ誓約と同じものです。私たちがこれらの誓約をどれほどよく守るかによって、この地球を離れた後に行く場所が決まるのです。



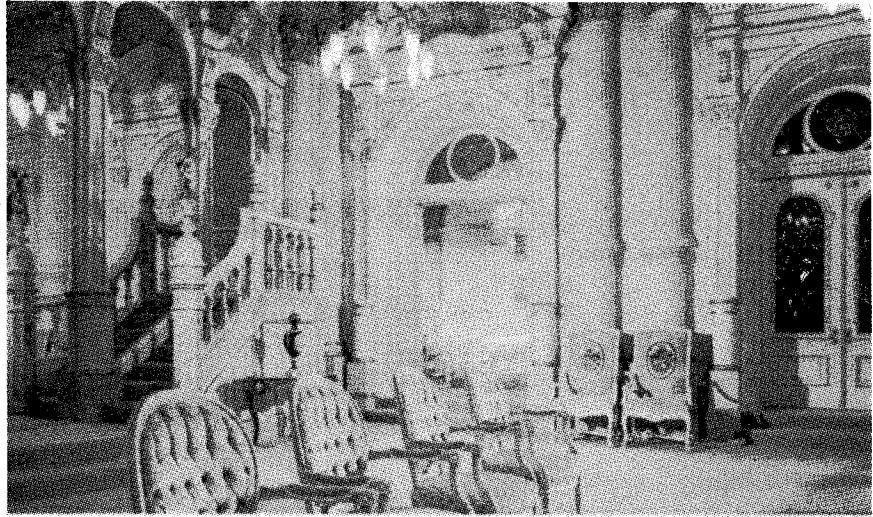
17. 君たち2人は、永遠の世界には4つの主な区分けがあり、そのうちの3つは栄の王国であると教えられてきました。君たちはこの世での行ないによって、このうちの1つを受け継ぎます。



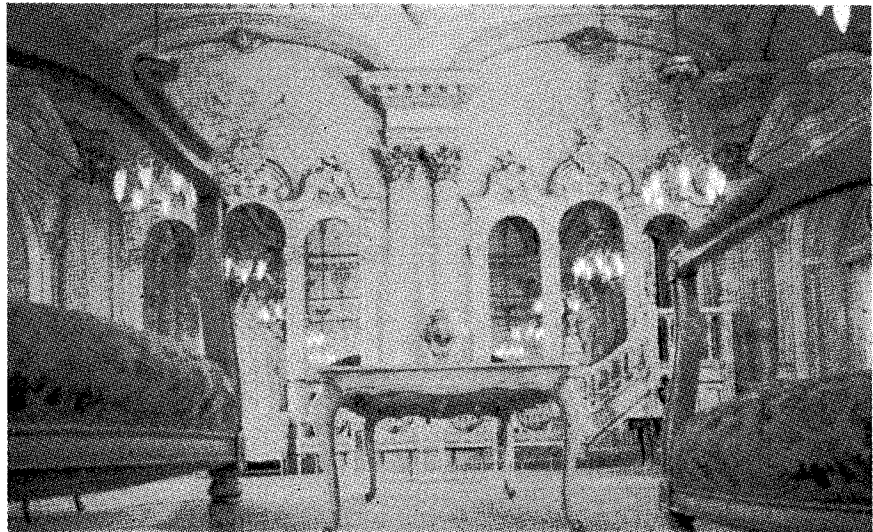
18. 福音の目的と神殿結婚の目的は私たちと一緒に住まわせるだけでなく、私たちに天父の最高の報い、すなわち日の栄の王国の昇栄の資格を与えることです。この王国は日の栄の部屋に象徴されています。



19. 日の栄の王国の昇栄は大切なものです。なぜならその状態でのみ、私たちはこの世で築いた家族関係を享受できるのです。昇栄は福音が私たちに備えてくれる永遠の旅路の一部なのです。



20. 神殿での結婚はお互いと天父との誓約です。なぜならば君たちは夫婦として、お互いにずっと誠実であると同様に、天父に対しても誠実であるという約束をするのです。

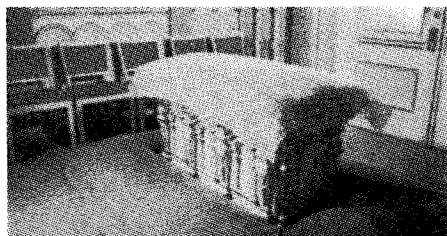
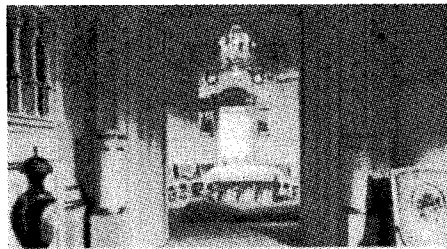


21. 君たちは神殿で聖壇にひざまずき、聖なる神権の権能により結び固められます。

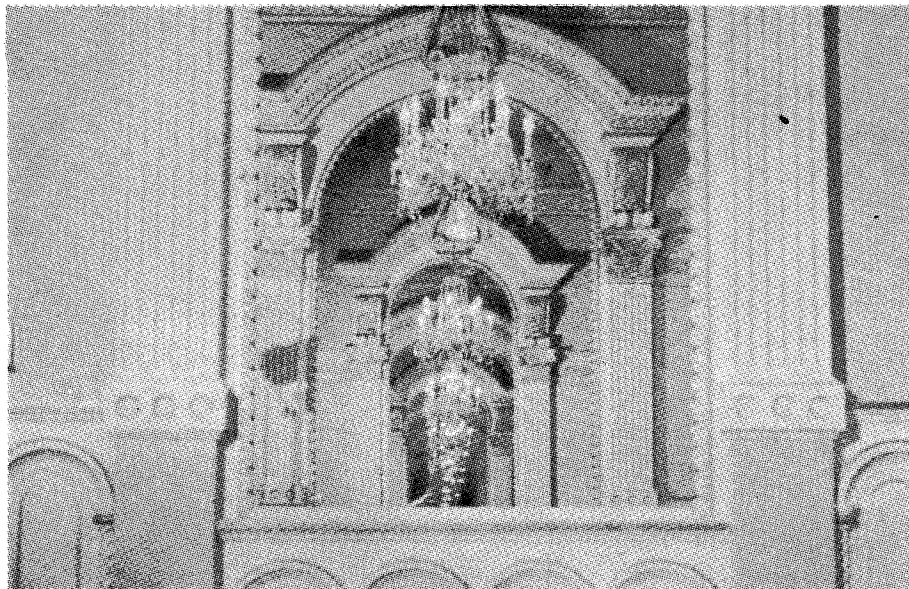
そしてこの結婚は死を越えて続く永遠の結合になるのです。

22. この権能は永遠に続く幸福な結合のうちに妻を夫に、子を両親に結びます。

そしてこの計画のすばらしさは、一緒にいることを別にしても2人の愛が深まり続け、かつて夢見た以上にその愛が美しくなることにあります。



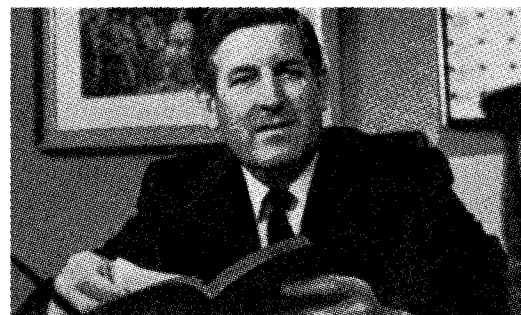
23. 主は私たちに、教義と聖約132章の中で、私たちが日の栄の結婚をしなければ、日の栄の王国の最高の位に至ることはできないと言っておられます。主はまた神殿外で結婚する人々に起こることについて、はっきり言っておられます。



24. 「この故に、ある男もこの世に於て妻をめとるに、われに由らずまたわが言によらずしてめとり、またその男この世にある限りその妻と誓い、妻またその男と誓うに、この誓も婚姻も彼ら死にてこの世の外に去る時は効力あることなし。この故にこの二人この世の外に去る時は如何なる律法もこれを結ぶことなし。」



25. 「この故に、彼らこの世の外に去る時は、めとり嫁ぎすることなくして彼らは天に於て天使に任命せらる。而してこれらの天使は、彼らよりも遙に高き光栄に適しき、また優れたる光栄、永久の効ある光栄に適しき者に奉仕すべき奉仕の僕なり。」



26. 君たちが共に成長するように人生のよいものを求めて下さい。また、天父の子にふさわしく、お互いに親切と尊敬の念をもって下さい。そうすれば2人の愛はますます深まるでしょう。この永遠の結合は日の栄の王国における昇栄の大切な準備となるものです。



彼らの 語ること

スペンサー・J・コンディー
博士
ブリガムヤング大学社会学准
教授

理想郷を追い求める人

動物心理学の分野における最もおもしろい実験の1つは、チンパンジーを使つての実験でした。1房のバナナを置いた部屋にチンパンジーを入れておき、食欲が次第に増しよだれをたらし始めた時にバナナの上から箱をかぶせてチンパンジーを少しの間となりの部屋に連れていきました。

チンパンジーのいない間に実験者たちはバナナのかわりにレタスを1個置き、もう一度その箱をかぶせました。チンパンジーは部屋に戻されると喜びいさんで箱のところにいき、指ではじくようにしてその箱を取りのけました。そこには期待していたバナナはなくレタスが置いてあるのを見て、チンパンジーは驚きうろたえたようでした。期待がはずれてひどく腹を立てたチンパンジーは気味の悪い鳴き声をたててレタスをひきちぎり、足で踏みつぶし、まったく食べられないものにしてし

まったのです。

おもしろいことには、そのレタスがバナナの次にチンパンジーの好物であるということです。事実、この2つのものを目の前に出されたら、普通のチンパンジーならバナナかレタスかと迷うところですが。このチンパンジーがレタスを拒んだ理由は、ただそのチンパンジーの心がすでにバナナに対して受け入れる準備ができてしまっていたということです。

多くの人々はこのチンパンジーと似ています。彼らは自分たちの住んでいる素晴らしい世界を、望むような完全な世界ではないという理由で拒むのです。つまり彼らは「理想」の世界にしか目を向けようとしません。

1. ジョン・レビーとルーズ・マンロー「幸福な家族」

ケイ・リン・ポー

不慮の死をとげる

数カ月前の、ユタ州ホラデーサウスステーク部大会での話

最近私は、伝道を終えてユタ大学に戻って来たばかりの1人の青年と会いました。ある日のこと、彼は私に伝道の召しを受けた時の経験を話してくれました。

ランディーという名のその青年はドイツ伝道部に召されたのです。彼はドイツ語を学ぶ最良の方法はモルモン経をドイツ語で読むことだと考えて、ドイツ語の辞書とモルモン経を買い、ニーファイ第1書から読みはじめました。

彼は前に一度もドイツ語を目にしたことがなかったため、しばらくの間は苦勞し、辞書と首っ引きの状態が続きました。しかしかなり進むにつれて言葉にも次第に慣れ、モルモン言のところにきた時は、さほど辞書を引かなくてもよくなりました。しかし突然彼はまったくもてに戻ってしまったのです。ドイツ語を少しも理解できなくなってしまったのです。それは著者が変わったからでした。その著者は、ニーファイが使っていたのとは違う単語を用いて書いていたのです。

ランディーは、モルモン経を読んでいて著者が変わると同じような経験を話してくれました。彼はこのことを通して、確かにモルモン経はジョセフ・スミスが書いたものではなく、何人かの著者が書いたものを天父のみ力により彼が翻訳したものであるということがはっきりとわかり、証が強められたと語ってくれました。

ライラ・チャドウィック
アイダホ州ツィン・フォールズおよび、ツィン・フォールズ・ウエストステーク部セミナーの卒業式での話。

「さて、この子羊に就きて為されたる様々の証の挙句、われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』こととなり。われらは、彼がすなわち神の右に座したもうを見たり。また、御父の生みたもう独子なりと証したもう声を聞けり。」(教義と聖約76:22-23)

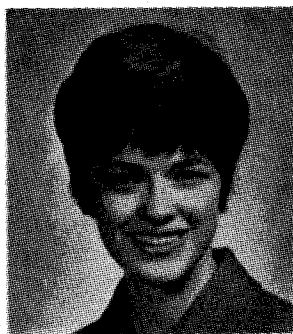
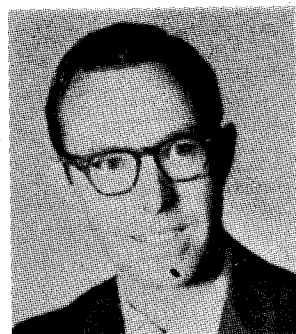
これは、ジョセフ・スミスとシドニー・リグドンが世の人々に述べた証です。彼らと同じように、確かにイエスは私たちの生ける救い主であると知ることができたなら、何と素晴らしい祝福ではないでしょうか。確かにそれができるのです。しかし、彼らのよ

うにだれもがイエスが生きておられるのを目のあたりにすることはできません。私たちは目に見えない風を感じる時と同じように、すなわち感じ(フィーリング)によって、イエスが生きておられることを感じ、その知識を得なければならぬのです。

イエスが生きておられるという証は私たちが持つことのできる最も素晴らしい賜物です。またそのような証を得ることが私たちの主な責任であり、最も大切な義務なのです。なぜなら、私たちはその証を通してのみ、神権、バプテスマ、聖霊の賜、エンダウメントそして永遠の結婚などの祝福を受けられるからです。

キリストが生きておられるという証は、人が持つことのできる最も素晴らしい財産です。

私には証を得たいと望んでいる友人がいます。彼はジョセフ・スミスやシドニー・リグドンのように、前向きで確かな証を持ちたいと望んでいます。彼は救い主が生きておられることを知りたいと思っています。実際はまちがった方向に証を求めているのです。ある日彼はこう言いました。「イエスが生きていることを科学的に証明してくれれば、ばくは君の教会に入ろう。」このように物事を科学的に証明しようとするのは、麦の量をものさしで計るようなもので、本来のあるべき姿ではないのです。



愛の力

七十人最高評議員会会員
ミルトン・R・ハンター

愛する兄弟姉妹の皆さん、きょう私は神のみたまに導かれてこの話ができるようにと願っている。

悪魔は人類の間に不和と罪、悲しみをもたらそうと全力をふりしぼっている。しかしこれらの不幸は、人々がイエス・キリストの福音の根本となる原則すなわち愛を実践する程度に応じて避けることができる。

ある時ひとりの律法学者がイエスをためそうとして質問した。『先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか』。イエスは言われた、『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である。『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とが、かかっている。』（マタイ22：35-40）

救い主の時代には、ヘブライ語の聖典はいくつかの部分に分かれていた。初めの5書は律法書と呼ばれ、別の書は預言書と呼ばれていた。律法学者に答えて主は申命記とレビ記を引用した。これらはヘブライ語の律法書のうちの2書であっ



た。こうしてイエス・キリストは、愛という2つの偉大な律法が、ヘブライ語の聖典にあるすべての宗教的な教えの中で基本となることを明らかにしている。

第一の大切な戒めは主なる私たちの神を愛することであるが、私たちはどのように神に対する愛を示すことができるだろうか、私たちは御子のみ名により御父に捧げる祈りの中で、また神々であられる御二方を礼拝することで愛を示すことができる。しかし、総括的な意味から主は次のように言われている。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。」(ヨハネ14:15) 言い換えれば、私たちは「神の口より出るすべての言によりて生きなければならぬのである。(教義と聖約84:44)

永遠の御父と独り子は共に、私たちに対して力強く広い完全な愛を持っておられる。また私たち以上にすぐれた知性と理解力を有しておられ、その愛の心は私たちの愛する力をはるかに越えている。この神々であられる御二方は非常に高められた愛の特性を持っておられるところから、聖典では「神は愛である」と述べている。(Ⅰヨハネ4:16) 事実、神の大いなる愛は、私たちが心の底から思い、強く認識したとしても、はるかに卓越したものである。偉大な霊的経験を通して、わたしたちを豊かに感じる時、私たちは神の愛が大いなることを一層強く感じるのである。

神は私たちの霊の父である。神は私たちをこの地上に置きたまい、独り子を通して救いという福音の計画を与えられた。それによって私たちは神のみもとに立ち返り、昇栄あるいは永遠の生命を受けることができる。この光栄ある位を得る者は、現在の理解力をはるかに越えた甘美な愛を経験することであらう。

「神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネ3:16)

イエス・キリストもまた私たちを愛する故にその命を惜しげなく捧げ、私たちの罪のために血を流された。そして万人

の復活をもたらされたのである。「人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。」(ヨハネ15:13)

全人類の中であって、イエスがパレスチナで、あるいは復活後にニューファイ人に現われて示されたほどに完全な愛の模範はない。イエスは病人をいやし、死人をよみがえらせ、盲人の目を開き、耳しいの耳を聞こえるようにされた。そしてらい病患者を清められた。イエスの心は貧しい者と悩める者に対するあわれみで一杯であった。その深い思いによって、それらの人々を霊的に高められたのである。

キリストの愛とあわれみは、モルモン経の中の幼な子らを祝福しているところに美しく描かれている。

「イエスは……とかれらに言って、涙を流したもうた。これは群衆が親しく見て証をするところである。イエスはそれからかれらの小さい子供たちを一人一人近よせてこれに祝福を与え、かれらのために御父に祈りたもうた。そしてこれをしてしまうとまた涙を流したもうた。イエスが群衆に『汝らの子供たちを見よ』と仰せになったから、群衆がこれを見ようと顔を上げる時天を仰いで見ると、天が開けて天使らが火の中に取り巻かれているような有様で天降り、子供たちを取りかこんだので子供たちもまた火に取りかこまれ、天使らは子供たちに祝福を与えた。」(Ⅲニューファイ17:20-24)

キリストの偉大な愛を示すすばらしい模範は、死の直前に十字架にかけられて苦もんしている時の様子に見られる。イエスは次のように祈られた。「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」(ルカ23:34)

イエス・キリストの福音であって中心となるテーマ、また最も強い力は愛である。救い主は使徒たちに教えられた。

「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての

者が認めるであろう。」(ヨハネ13:34-35)

キリストは第二の大切な戒めを、自分を愛するように私たちの隣り人を愛することであると言われた。偉大な教師である主は、自己中心になることが人間の本性であることを知っておられたのである。そのため私たちはよいクリスチャンとなるよう、自分を愛するように他の人々を愛さなければならない。自分を愛するように隣り人を愛するならば、私たちが隣り人に接する時の態度は、親切、キリストの純粋な愛、寛容によるものであるだろう。そして私たちの行ないはすべて愛によって和らげられることだろう。イエスも次のように教えておられる。

「しかし、わたしはあなたがたに言う。敵を愛し、のろむ者を祝福し、憎む者に善をなし、さげすむ者、迫害する者のために祈れ。こうして、天にいますあなたがたの父の子となるためである。……あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」(欽定訳マタイ5:44-45, 48)

夫婦が末日聖徒の場合、夫と妻の関係はどのようにあるべきだろうか。

夫と妻は互いにいつも慈愛深く親切でなければならない。どちらも相手の気持を傷つけるようなことを言ったり、行ったりしてはならない。絶えず2人の間には深い愛と愛の表現がなければならない。どんな時にも、相手の生活に喜びと幸福をもたらすためにあらゆることをする努力を心がける必要がある。夫は妻の仕事に感謝の気持を示し、妻も同じようにするのである。互いに相手を高め、幸福にする方法を見つける必要があろう。夫も妻も、互いに愛を示さない日を1日たりとも送ってはならない。相手はわかっているはずだから示す必要もないなどと思ってはならないのである。ある時、私が責任を与えられていた大会に、恵まれてジョセフ・フィールドینگ・スミス大管長と妻のジェシー姉妹が出席されたことがあった。その時、スミス姉妹は次のように話された。「私は1日たりとも夫に私が愛していることを言わなかった日はありま

せん。夫も私にそのように言わなかった日はないのです。」

このような間柄のところでは、神はその夫婦に、特に主の宮居において神権の権能により結ばれた夫婦に、天から恵みを注ぎたもうことであらう。そして高きところより来る権能は、このような夫婦の愛と結婚を永遠に結ぶであらう。

デビッド・O・マッケイ大管長はつねに家庭における愛と一致を強調して言われた。「家庭は愛によって永遠のものとなる。」(「幸福への道」P.114)

「自制の価値を知ろう。口に出されなかった言葉を後悔することはないのだ。私は自制を欠くことが不幸と不和をもたらす最たる原因であると思っている。私たちは他人のいやなところを見つけて、非難しがちである。そしてその非難の言葉は悪感情を生む。もしいやなところを見つけても言わないでおこう。少したてば、敵意や悪意のかわりに一致と安らぎだけになるのだから。舌を抑制することは、家庭に一致をもたらす最も大いなる力であり、私たちの多くはこの力を伸ばさずにいることが多々ある。」(「同上」P.120)

愛はまた家庭生活の中心が何であるかを明らかにするものである。両親は、すべての子供がつねに家族にとって大切な存在であることを感じさせる必要がある。そして自分たちの愛を子供たちに表わさなければならない。心から愛していることを、いろいろな方法によって示すのである。このような家庭には主のみたまが宿るであらう。家族は愛のもとに一致し、それゆえ神のもとに一致するようになる。次に子供たちは両親に対して愛を示し、両親を喜ばせるよう努力するようになる。

深い愛により行動する家族にとって、その目標はすべてにおいて救い主の戒めを守ることであり、いつの日か永遠の御父とその独り子のみもとに立ち返って共に住むことであらう。

主の真の福音が再び地上に回復され、主の教会はこの末日聖徒イエス・キリスト教会であることを証したい。

イエス・キリストのみ名により、アーメン。

悪への寛容

M・グラス・バーネット

人がいとも簡単に悪を容認してしまうことに驚かざるを得ない。そのほとんどが明らかにサタンから来るものであり、かつては公に非難されていた行動や考えを、少量ずつではあるが次第に量をふやしつつ、今日より多くの人々が味を覚え好みは始めている。

この原則の2つの例を見てもらいたい。1つは、非常に短いスカートがほとんど世界中の人々に受け入れられているということである。ミニスカートを道徳上問題があると指摘する人々は淑女ぶる女という刻印を押され、またそう見る方の側が悪いと言われる。このような態度は教会の中でもまったく見られないわけではない。教会が慎まやかな服装という標準をうち立てているのを知っているにもかかわらず、何の気のともめもなくそのような悪への寛容心を身につけている女性や男性がいる。

もう1つの例は、同様に人々の間に入り込んでいるものであるが、恐らくもっと重大なことである。表向きは表現の自由、芸術におけるリアリズムの追求という理由で、映画製作者、作家、テレビのプロデューサーたちは、今日では「現代的、進歩的な考え」を示すに他ならないが、10年前ならわいせつと騒がれたであろうみだらなことを世に流れ出るままにしているのである。

この世界的なわいせつに関する問題は真剣に考慮されねばならない。第一に、人を食物にし、そそのかしたりする性的な事柄を売りものにすることは、キリストの教えに反するということが論争の余地はないのである。これらのものに自ら染まろうとする末日聖

徒は、悪に加担しているのである。これはそれ自体悪であるばかりか、その悪影響が他の不道徳な行ないを生み出す結果ともなる。

主が「罪を見ていささかもこれを許すを得ざればなり」と言われていることから、もしみだらな本や映画、テレビなどに少しでもかかわりを持つなら、我々は自らを危険にさらすことになるのである。それははっきりしている。ふさわしくないものをすべて見分けるのはそう簡単なことではないかもしれないが、恐らくそうしたケースの95パーセントまでは問題ないであろう。

末日聖徒にとり、さらに困難な問題と思えるのは、ポルノやわいせつに立ち向かう政府の態度にどのような立場をとるべきかということである。末日聖徒の住む国々の政府がわいせつに対してとっている態度はさまざまである。しかしほとんどどの政府も表現の自由を保障しており、中には性的なものが世にはびこるのを制すべきではないと感じている国民もいる。

たとえば、アメリカは考え方の変化が著しい典型である。1957年までは、合衆国の最高裁判所が米国憲法第1条の修正により、わいせつは保護されるべき表現ではないという原則を認めていた。最高裁はわいせつとは何かははっきりしないまま、とにかく強くそれに反対していたのである。

今日、人々は驚いている。世の中には何ものをもわいせつとは見ず、あるいはわいせつを保護された表現の一方法とする微妙なしかし現実の傾向がみられる。これが前述した次第に大きく

なりつつある悪への寛容の姿である。そして法的に支持を得ているものもある。そのような支持のほとんどは、外面上表現の自由が他の何よりも重要であるという概念に基づくものである。

数年前にあるコメディアンが社会問題を取りあげ、「市民の自由を叫ぶ人々」が本当は憲法にない快樂の自由を求めながら、言論の自由にあやかってわい談を弁護していると言ったが、それは凶星であったように思われる。彼はさらに詩をこっけいにもじって、このような考えをつけ加えた。「さあもっと読もう、いかがわしい本は楽しいものだ。」

表現の自由は確かに貴重な特権である。人間の自由意志に関する末日聖徒の神学は、真理の探究について可能な限り広範囲な話し合いがなされるべきであると我々にはっきり教えている。

しかしながら、どの社会も絶対的な拘束のない自由を認めているなどと誤解してはならない。責任があってこそ自由は意味をなすのである。人々を危険にさらして自由を行使するような人に自由を与えるのは愚行であろう。

わいせつを売り歩く者、すなわち商業上許容されている媒体を利用する人々は、社会にとり危険な人々といえよう。ほとんどの場合、彼らの商品は重要な問題についてより深く討論するためではなく、利益のためにあるのである。

民主社会に見られている悪い思想をさえ擁護することと、映画やテレビ、印刷物などで欲望を満たすこととはまったく異質のものである。

また1日が過ぎて、ジェリー・アンドリュースは分隊のテントの中にある自分の簡易寝台にもぐり込んだ。

みんなは戦争が終りに近づいていると言うが、彼はまだ戦争を厳然たる事実として身近に感じていた。護送という仕事はつねに油断ができず、非常に疲れる仕事であった。寝台に横になり、移動のことなど気にしないでだけでも本当に楽だった。

「おい、坊さん」、ジェリーにこのあだ名をつけた親友のシュミットが声をかけた。「食事に行くかい？」

「少し後にするよ。今はとても疲れてるから。ここに横になって体を休めたいんだ。」

「じゃあ食えばくれるなよ。ブリレイ軍曹が行列に近づいたらもう終りだからな。俺は先に洗面所へ行ってるぜ。」

「戻って来たら声をかけてくれよ。それから行くから。」

シュミットは行った。目を閉じるとジェリーはすぐに眠ってしまった。彼ははっとして目をさました。外は暗かった。シュミットは、食事に起こしに来なかった。ジェリーは、テントの端にあるカーターの寝台を囲んでいる隊の仲間に目をやった。

「おい、坊さん」カーターが呼んだ。「お目覚めのようだね。残念ながらみんな終わっちゃったところだぜ。」

「何をやってるんだい？」彼はカーターの寝台の方へ歩いて行った。シュミットがトランクの端をあけてくれたのでそこへ腰をかけた。

「司令官のおやじさんが言うことには、今晚以後はもうテントに酒がなくなるとのことだ。きょう中隊の連中が張ったあのテントから酒を買い戻してくるまで、酒盛りをおあずけしなきゃならないのさ。それにケアリーがたった今おやじになったことがわかったんだ。」

「おめでとう、おやじさん。」

「ありがとう、坊さん。」

「それから、俺に国へ帰る命令が今出たんだよ。4日後に出発さ。」カーターが続けた。

「そりやすごいな、カーター。」

「それでこうして集まって、3つ一緒のパーティーを開いているという訳さ。坊さんもやれよ。」カーターがびんを押しつけた。「俺たちと一緒に飲めよ。」

「いや結構だ。」

「さあ、坊さん。もう2、3日で俺は国に帰るんだ。友だちだろう？」

「そうだ。でも。」

「いったい何なんだよ。俺たちは友だちかい、それとも違うのか？」

「わかってるだろう。」

「そんなら飲めよ、相棒。それに、ケアリーはおやじさんだ。立派な坊さんよ。こんな特別な時には人間らしいところを見せてくれねえのか。」

「見せてくれるさ。さあ、坊さん。だれも初めて父親になるのは1回しかないんだ。」

「飲めないよ。」

「どうしてだろう？」カーターはもう1本のびんを開けてひと飲みすると、ケアリーに渡した。

「つまり、私の宗教に反するからだ。それに、とにかくアルコールは体に毒だ。」

「やめろよ。日曜学校のレッスンで覚えたような答えじゃ

いまひとたび

ジョセフ・ティルトン



ねえか。まるで子供が詩か何かを暗しょうする時のようだ。毒にはならねえよ。朝になれば体から出ちゃうさ。それとも何かい、俺たちの友情にその毒を注ぎ込もうってのかい。」
カーターは親指と人さし指でびんに入った酒の量を示した。

「たった1センチで友情をおちこわすことになるんだぜ。」

隊の残りの者の中からもけしかける声があがった。親友だったはずのシュミットまでがさかんに勧めるのだった。「坊さん、やれよ。ひと飲みじゃないか。」



「ほんのちょっとだけだろう。」

「これっぽちのものが何で体に悪いんだよ。」

「命に別状はないさ。さ、お前も人間だってことを見せてくれよな。」

11対1、そしてその11人はみな親しい隊の仲間なのだ。国を出て以来5カ月、いつも一緒だった。家族や恋人のこと、軍のこと、それに将来の生活の設計に至るまで、何でも打ち明け合った。そして、軍以外の普通の生活では味わえないような固いきずなが、1人1人を強く結びつけてきたのだった。だが、彼ジェリー・アンドリュースには、完全に腹の底からみんなにとけ込めないものがあった。

びんが、いつの間にか手の中に置かれていた。びんを持ち上げると、みんなの視線がジェリーの顔に注がれた。そして液体が傾けたびんの中から口へ入った。口もとからびんを離れた時、ジェリーには、まるで火が体の内部を上から下へなめ尽くしていくように思われた。むせかえり、苦しみのために目から涙が出て来た。気がつく、テントの中は静まりかえっていた。

「アンドリュース、やったな。」信じられないといったふうで口火を切ったのはカーターだった。

「やったな。」ケアリーが言った。「俺たちと全然違わねえじゃねえか。」

「何だよ、アンドリュース。」シュミットがつけ加えて言った。「ケアリーの言う通りだ。お前もここにいるみんなと変わらないんだな。」

ジェリーは胸がむかつくのをおぼえ、その場を去った。見ると、ちょうどドアのところに、彼らのリーダーのアレン少佐が沈んだ顔をして立っていた。「ジェリー、私は君だけは違うと思っていたよ。本当にそう思っていた。」

「で、でも、私は……」ジェリーはうめくようにして言った。「もう1度、もう1度だけチャンスをください。このことはなかったことにして忘れてください。」

「だれも忘れることはできないよ、ジェリー。君は、初めはみんなと違っていた。だが今は同じだ。彼らは、君が飲んだことを口実に自分たちの行動を正当化するだろう。君は彼らの口実に使われるんだ。」

「そんな／そんなこと考えませんでした。もとの状態に戻してください。」

「できないよ、ジェリー。君は、これから進む道がたった1つしかないという事実が目覚めなければならないのだ。」

「目を覚ますんだよ／」

ゆずられてジェリーは目を開けた。シュミットがシャワーを浴びたまの体でジェリーの足をゆすっていた。「坊さんよ、本当に眠っちゃったな。あと5分ある。走れば食えるぜ。おい、何だってニヤニヤしてんだい。そうさ、お前に勧められてた本読まなきゃな。お前のような大めし食いのことが書いてあるかい？」

再び三条に 教会支部ができる

1940年代の終りから50年代のはじめにかけて、宣教師が日本にもどってきた頃、人口90,000人の新潟県の三条は、福音が最初に開かれた町の1つでした。数年後、いくつかの問題から合併され宣教師は離れました。それは三条の会員たちにとって悲しい日々でした。

しかし14年後、再び伝道を開始するため、東京から宣教師がやってきました。

1971年3月16日到着するやすぐ活動がはじまりました。4人の宣教師と3人の会員で、日曜集会所がはじまった三条伝道地はその後急速に成長しました。教会の二階の六畳で開かれていた集会所は、改築した一階に移りました。三条に住む昔からの教会員が基礎となり、会員も増加してきました。

この3月19日、それは伝道開始後1年目になりますが、トモスエ・アボ伝道部長管理のもとに、独立支部になりました。66名の会員と家族が出席しました。

昔からの教会員である前田裕一兄弟が支部長に支持されました。バプテスマを受けてわずか5か月で長老として聖任された南波弘兄弟が第一副支部長兼書記に任命されました。また池田弘兄弟が長老に支持され第2副支部長に任命されました。日本伝道部内においても三条はどこよりも早く進歩している支部の一つです。「みたま」と福音への愛をとおして会



員たちは大きく成長してきました。

アボ伝道部長は、近い将来、礼拝堂が建てられるように頑張ってくださいと会員たちに話されました。会員たちが今もっている精神からみても、この目標達成はそう遠いことではないでしょう。

写真説明：三条支部長会と会員

前列右より2番目	前田 裕一	支部長
前列右端	池田 弘	第2副支部長
後列右端	南波 弘	第1副書記

東地方部組織の紹介



昨年1月31日、3つの地方部が組織されましたが、役員の充実と効果的な指導を意図として、この度2つの地方部に統合されました。東地方部役員をご紹介します。

写真説明

前列左より	後列左より
関 澄夫 評議員幹部書記	綿沢三千男 評議員
工藤 栄一 第2副地方部長	景山恵美子 扶助協会第1
浜田 哲 地方部長	金子 良子 扶助協会会長
真下 宏 第1副地方部長	市川 裕子 YWMIA
新居 休 書記、評議員	渡辺 道大 YMMIA
	(桂 文子 YWMIA第1)

西宮支部鍬入式

去る2月19日、待望の鍬入れ式が西宮支部で行なわれました。清水伝道部長夫妻をはじめ、ハーディング監督、神尾地方部長など多くの兄弟姉妹が参加し、記念すべき式典は、簡素な内にも力強く行なわれました。

西宮支部は、ブラウン監督の下で建築宣教師により建築され、8カ月で完成の予定、3月10日頃には基礎のコンクリートが打ち込まれるほどの急ピッチで進んでおります。ちょうど学生の春休みの時でもあり、朝早くから兄弟達も参加して作業が進められており、姉妹達も、食事の準備に大わらわといったところです。

神尾地方部長をはじめ、大阪地方部の全会員が、全面的にこれを支援し、一日も早く教会堂を完成させる様働いております。

西宮支部は、建築中は、現在の尼崎支部の建物で2部制で



集会を開いています。

住所：兵庫県尼崎市南塚口町2-12-21

南塚口ビル2階

京都支部の完成

オルソン監督の下、多くの建築宣教師の働きにより3月末日で建物が完成し、4月1日にオープンハウス、2日の復活祭の日から集会を行なうことになりました。多くの援助をありがとうございました。オルソン監督はじめ、建築宣教師にも心から感謝しております。

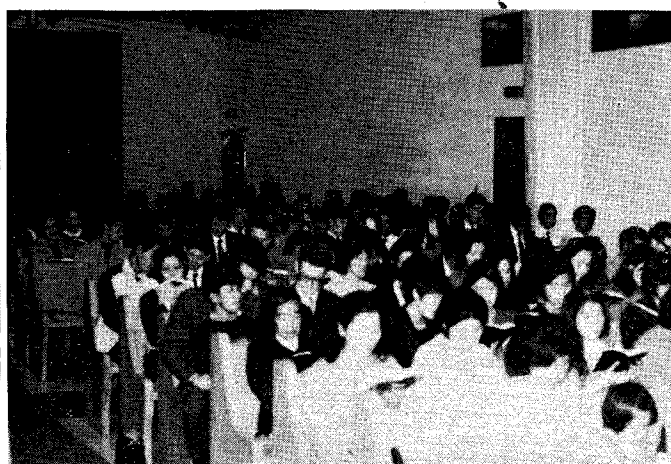
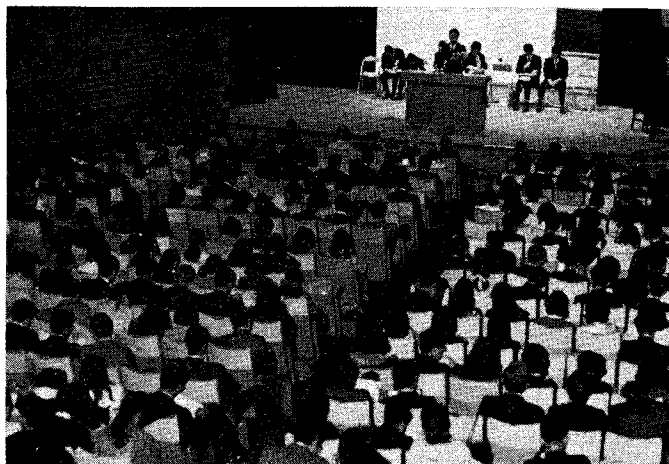
モルモンセブンの活躍



宣教師7人からなるモルモンセブンが、各支部を回って、オープンハウスの行事を行ない、多くの求道者を得るために活躍しています。

去る2月14日、坂井時忠兵庫県知事を訪問、演奏をしました。坂井知事は昨年、他の7県の知事と共にソルトレークを訪問して、教会の幹部と親しく会い、厚いもてなしを受けました。

4月には、中部テレビで、出演の話も本決まりとなり、今後の活躍が、大いに期待されています。



地方部大会

2月、日本西部伝道部では1カ月間にわたって中国、九州北部、九州南部、沖縄の地方部大会が開かれ、千人以上の兄弟姉妹が集う靈感あふれる大会となりました。

2月19、20日の両日に行なわれた沖縄地方部大会は、5月15日の本土復帰を目前に控えた復帰前の最後の大会で、戦災や統治下の苦勞に耐えてきた人々に対する伝道部長の祝福の言葉や伝道部長会の力強い証に、多くの兄弟姉妹が真剣に耳を傾け、それらの1つ1つを心に深く刻み込みました。

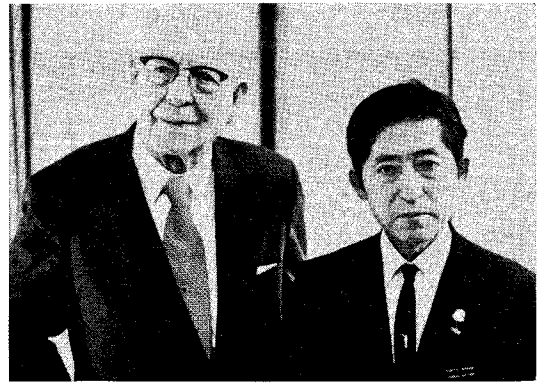
また2月2、3日に行なわれた九州北部地方部大会には、数人の耳の聞こえない兄弟姉妹が出席して、多くの人々に深い感動を与えました。この兄弟姉妹たちは、壇上で話される言葉に全身全霊を傾け、あるいは宣教師の筆記する文を読み、あるいは互いに手話を交わすことによって、指導者の話や兄弟姉妹の証を聞きました。

主があらゆる人々に福音を与えたまい、救いの計画を備えておられることをさらに強く感じることでできた大会でした。またこの伝道部においても、聖典に記されている1つの真理が確かに成就されつつあることをはっきりと知ることができました。

その時、耳の聞こえぬ者たちもかの書物の言葉を聞き、目の見えぬ人たちも不明なる暗黒の有様でなくなり、よく見て知ることを得べし。(Ⅱ ニーファイ27:29)



日本人初の 祝福師誕生



今年最初の東京ステークス部大会が2月26、27日の2日間にわたって開催されました。恵まれて今大会には十二使徒リグランド・リチャーズ長老が来日され、その靈感あふる言葉は大会に集った聖徒たちすべての心を魅了し、会場は感動のるつぽと化しました。

三代続いて十二使徒に召されるという血すじの良さに加えて、ミスター宣教師と異名をとる彼の伝道生活をも含めて、その豊富な経験（各地の監督、ステークス部長、伝道部長、管理監督を歴任）からわき出る話はとどまるところを知らず、そのまま私たちの人生の指針となり、霊を目覚めさせてくれるものでした。

* * *

今大会にあって東京ステークス部はまた大きな祝福を受けました。それは日本人としてはもちろんのこと、アジアで最初の祝福師が誕生するという文字通りの祝福を受けたのです。その期待をになって祝福師に召されたのは横浜ワード部の渡部正雄兄弟でした。渡部兄弟が祝福師として召されるよう支持が取られた時、多くの人々が東京ステークス部の歴史の一瞬に立ち会っている喜びと感動を味わったことでしょう。これからは日本人によって、日本語で祝福を聞くことができるのです。

* * *

<渡部正雄兄弟の略歴>若い頃から真理を求めて数々の宗教を遍歴した彼は、戦後、キリスト教に接し、まずカトリック教会に1年間、プロテスタン

トの教会に1年間とそれぞれ経験した。しかし彼の求めてやまない心はついに本当の真理を探りあてることができた。1949年11月6日、仙台の広瀬川上流において大いなる感動をもってバプテスマを受けたのである。それから1カ月余り後のクリスマスの日にアロン神権祭司の職に聖任され1952年4月20日にメルケゼデク神権を受け、長老の職に聖任された。1952年5月13日に日本人として初代の仙台支部長に任命された。その間仙台の地で自ら受けた真理をより多くの人々と、伝道に熱意を燃やし、毎日通う列車の中で悔い改めを叫び、チラシを配り、「キリストさん」と呼ばれながら毎日伝道活動に専念した。その精神は子供達にも受け継がれ、後でも述べるが三男の正和兄弟がブラジルに伝道したとき言葉をかけられたある求道者は、昔、同じ内容のものを聞かされたと言った。それは仙台の地で「キリストさん」に声をかけられた人だった。彼の目の前に立つ宣教師がその息子とわかり、その求道者は感激してバプテスマを受けた。

彼の伝道活動の影響は遠く地球の裏側まで届いていたのである。なお現ステークス部高等評議員の斉藤三正兄弟は「キリストさん」に列車の中で伝道された1人である。

1957年9月1日、教会の翻訳者として伝道本部に召されて、横浜にその居を移した。翌1958年4月に伝道部系図委員会会長に任命され、ステークス部になるまでこの職は続き、この間、地方

部評議員、副地方部長等を兼任した。

1970年3月15日、東京ステークス部誕生と同時に十二使徒ゴードン・B・ヒンクレー長老により七十人に聖任され、東京ステークス部伝道部長会第二副伝道部長に任命され、第一副伝道部長になったあと、1971年9月19日、ナサン・エルドン・タナー副管長により大祭司に聖任され、高等評議員代理に召され、1972年2月27日、十二使徒リグランド・リチャーズ長老により東京ステークス部祝福師に聖任されたのである。

彼の家は大家族としても有名である。妻尚子姉妹との間に6人の子供達がいる。長男正尚兄弟は現在日本伝道部第二副伝道部長の責任を果たし、妻フェリス姉妹との間に6歳と3歳と1歳の子供がある。次男正二兄弟は現在ハワイのチャージカレッジで数学を教え、妻のクレア姉妹も高等学校で数学を教えており、生後3カ月の子供がある。3男正和兄弟は現在ブリガム・ヤング大学で勉学に励んでいるが、以上3人の兄弟はそれぞれ2年間の伝道を経験している。長女聖子姉妹は子供の日曜学校で、また次女安子姉妹は初等協会の会長会でその責任を果たし、4男正末兄弟は現在執事定員会会長としてがんばっている。この信仰の大家族は祝福師の父親を家長として今後もより一層発展し、そのモルモン・スピリットを多くの人々に示してくれることであろう。

聖徒の道

昭和42年12月18日第三種郵便物認可

1972年4月20日発行（毎月1回20日発行）第16巻 第4号

